
ドール - 迷子の音符たち - (下)

粟吹一夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドール - 迷子の音符たち - (下)

【Nコード】

N2542Z

【作者名】

栗吹一夢

【あらすじ】

「自分は可愛くない。可愛くてはいけない」

そんな呪文に悩まされ、男の子を好きになることを避けてきたナオは、三つ編み瓶底眼鏡とおしゃれとは無縁の女子高生。

そんなナオが転校してきた高校で、髪を金色に染めたイケメンで女子生徒の憧れの的であるカズホと知り合う。

共通の趣味である音楽を通じて密かに親密になる二人。

そして、学園一の美少女レナと知り合ったナオは、お互いの悩みを告白し合い、カズホへの想いを新たにす。

カズホとナオの恋の行方は……。

ドール 迷子の音符たち

第五章 二つの告白

数日後の放課後。

ナオが一人で下校していると、校門の側にレナが立っていた。

レナは微笑みながらナオに話し掛けてきた。

「こんにちわ、水嶋さん。ちょっと付き合ってもらえる時間ある？」

「あつ、はい。大丈夫です」

ナオは、ドールにカズホが来る時間までに終わるかどうかをちょっと心配したが、顔には出さなかったつもりだった。しかし、レナにはお見通しだったようだ。

「ドールに寄って勉強をする時間をなくさないようににはするから。

それにカズホは、今、練習中でまだ来ないと思うし」

「さ、佐々木君のことは関係ないです」

「分かった分かった。ふふふ。あんまり外でできる話じゃないから、私の家まで来てくれたりする？」

「は、はい」

二人は他愛のない話をしながら立花楽器店まで歩いて行った。楽器店に着くと、裏口から中に入り、プライベート用エレベーターに乗り六階に上がった。エレベーターを降りた所は、玄関のような靴を脱ぐスペースで、その先は廊下になっていた。

レナは、廊下に三つあるドアのうち、一番手前のドアに入った。

「ここが私の部屋。どうぞ」

「お邪魔します」

ぬいぐるみや可愛い雑貨が置かれた、いかにも女子高生の部屋という感じだったが、エレキギターと小さなアンプ、アコースティックギターやキーボードなどが置かれていて、レナが楽器店の娘とい

うことを思い出させてくれた。

いったん部屋から出ていったレナは、ジュースを入れたコップを二つ持って来て、部屋の中央にある小さなテーブルに置いた。

そのテーブルに二人は向かい合って座った。

「やっぱり立花さんも楽器するんですね。軽音楽部にいた時は、ポーカーをしていたって聞いたんですけど」

「カズホから聞いたの？」

「はい。立花さんならステージ映えするだろうなあ」

「そんなことないよ。でも歌ってたら嫌なこともすぐに忘れることができる。人間、やっぱり声に出して誰かに伝えようとすることで気持ちの切り替えができるんじゃないかな。一人でくよくよ悩んでいても何の解決にはならないし……」

「……」

レナは真剣な眼差しでナオを見つめながら話し始めた。

「今日、水嶋さんに来てもらったのは、私の頼みを聞いてもらうため。そして私の本当の気持ちを聞いてほしいから……。良いかな？」

「……はい」

「ありがとう。……まず、お願いっていうのは、水嶋さんに軽音楽部に入ってほしいということ。カズホやマコトと一緒にバンドをやってほしいってことなの」

「えっ？」

「この前、ドールでそんな話をしていたでしょう。その時にもちよつと言ったけど、女の子のメンバーがいれば、私も一緒にできるかもって考えたの。……そう、このお願いはカズホのためでもマコトのためでもなく、私のためなの」

「……あ、あの、なぜ、私が佐々木君達と一緒にバンドをやることが立花さんのためになるんですか？」

「私ね……、カズホに振られちゃったんだよ」

「えっ！」

突然のレナの告白を受け、以前、レナに嫉妬したことを思い出し

たナオは、その思いも寄らぬ展開にただただ驚くばかりであった

「私、中学の時からマコトとずっと一緒にバンドをしてきて、まあマコトとはそういう関係にはならなかったけど、高校に入って、マコトと一緒に軽音楽部に入部したら、カズホがいた。私、一目見て好きになった。演奏を聴いてもずっと好きになった。そんな気持ちは初めてだった。寝ても覚めてもカズホのことはかり想ってた。我慢できなくて、私、カズホに告白したの。『好き』って」

「……」

「でも、カズホからは『今は、バンドに夢中になっているから、つき合うなんてことは考えられない』って言われて……。たぶん、カズホなりの優しさで言ってくれんたんだろうけど、はっきり言って振られちゃったわけ。それで軽音楽部に居辛くなって、休部届け出して、ずっとお休み中ってことなの」

「……立花さん」

「私って負けず嫌いだからさ。全然、傷も負っていないような平気な振りをして、カズホには『友達として、これからも話をさせて』って言って、友達としての付き合いは何となく続いているんだけどね」

「……」

「でもね、この一年間、本当はずっとバンドをやりたくて仕方がなかった。私って物心付いた頃から音楽に囲まれて生活してきたから、音楽は私の体の一部になっているって言っても良いくらい。カズホやマコト達とバンドをやりたいうって、ずっと思っていたの。でも、やっぱり吹っ切れなくて……。でも、この前、ドールで話した時に閃いたのよ。水嶋さんがカズホのバンドに入ってくれたら、私もまた一緒にできるかなってね」

「あの、どうして私なんですか？ 私以外にも楽器ができる女の子はいるはずですよ。私じゃなくても良いんじゃないですか？」

「あなたじゃなきゃいけないの。だって、……カズホは、あなたのことが好きだと思うから」

「えっ！」

またまた衝撃の告白だった。しかも、それはレナ自身のことではなく、ナオに対するカズホの気持ちについてであった。しかし、「好き」という言葉は、呪文が許してくれなかった。

「……そんなはずはないです、絶対。佐々木君が、私みたいな、可愛くない女の子を好きになるはずありません」

「うん。私、ドールでの二人の会話を聞いてすぐに分かったわ。そうね、……まだ好きってところまで行っていないのかも知れないけど、あのカズホが水嶋さんに対して普通に話しているのを聞いて、少なくともカズホは水嶋さんに対して好意は持っているなって感じたの」

「普通に話しているって？」

「カズホってね、女の子に対してまともに話ができないのよ。どこかぶつきらぼうで……。でも水嶋さんには、……そう、マコトと話す時みたいに普通に話していたの」

そのことはナオ自身も感じていたことだった。しかし、それはカズホ自身から話しやすく面白い女の子だと言われて話をしているだけで、それ以上の意味を考えたことはなかった。

「それって、たぶん、私が女の子って意識されていないっていうことじゃないでしょうか？」

「うん。ある意味、そうかも知れない。少なくとも、カズホがこれまで関わってきた女の子と水嶋さんは違うのかもね」

「……よく分からないです」

「私もカズホのすべてを知っているわけじゃないから正確じゃないかも知れない。でも、ドールで、私が水嶋さんに質問したことに對して、全部、カズホが答えていたでしょう。まるで水嶋さんを守っているみたいだね。カズホは水嶋さんに対して好意は持っているはずよ」

「……」

「そんな水嶋さんが同じバンドにいてくれたら、私、過去のことは

忘れて音楽に専念できそうな気がするの。つまり、……うまく言えないけど、カズホはもう水嶋さんのものだって思うことで、私は、音楽を愛するバンドメンバーとして、カズホと接することができそうな気がするの」

「立花さん。立花さんは、まだ佐々木君のことが好きなんじゃないんですか？」

「吹っ切れていないといえは嘘になる。そう、まだカズホが好き。でも、カズホは私みたいな子より、たぶん水嶋さんのような、どちらかというと後から黙ってついて来てくれるような女の子が好きなんだよ。私って、言わなくても良いことをつい言っちゃうことが多いからね」

「立花さんは、本当にそれで良いの？」

「振り向いてくれない相手をずっと待つことは、私にはできない。それに、カズホのベース、マコトのギターをバツクに歌いたいという欲求を抑えつけることは、もうできないかも知れないって、最近、特に思ってきているの。……どう、水嶋さん。私のお願ひ、聞いてくれないかな？」

レナは両手を合わせてナオを見つめた。しかし、ナオには、まだ呪文を破る力はなかった。

「私は……、駄目です。立花さん。佐々木君には立花さんのような女の子がふさわしいんです。私なんか駄目です」

「どうして駄目なの？ 水嶋さん。前にも訊いたけど、どうしてそんな格好をしているの？ その格好が関係しているのかしら？」

「そ、それは……」

「おしゃれに無頓着な感じにしているんだけど、違うよね？」

「えっ」

「水嶋さんの髪。ちゃんと手入れされていて綺麗だし、制服や靴なんかも清潔にされている。本当におしゃれに無頓着な人って、そんなところに気を配らないものよ」

「……」

「水嶋さんのその格好、わざと可愛くないようにしているとしか思えないんだけどなあ。そのことと水嶋さんが軽音楽部に入ることができることとは何か関係があるの？」

「それは……」

「私ね、今日、ずっと悩んでいたことを、全部、水嶋さんにぶちまけちゃって何だかすつきりしたんだ。自分一人ですつと悩んでいたのが馬鹿みたいに思えるほどにね。水嶋さんにも何か悩みがあるのなら、私に話してみない。私が解決できるようなことじゃないと思うけど、人に話してしまうことだけで気分が軽くなることだってあると思うよ。……もちろん無理には言わないけどさ」

「立花さん。……ありがとう」

ナオは、正直に自分をさらけ出し、言いたいことが言えるレナのことを羨ましく思った。また、そんなレナの態度に感動もして、自然と涙が流れ出てきた。

「……そうだよね。立花さんがちゃんと話をしてくれたんだから、私もちゃんと話す」

「うん」

「実は……、私、今のお母さんとは血が繋がっていないの」
「えっ」

「私を生んだお母さんは、私が小学一年生の時に病気で死んでしまったの。今のお母さんは、お父さんが再婚した相手」

「そうなの」

「私が小学四年生の時に妹が生まれたの。その時から、私は可愛くてはいけないんだと自分で決めて……、思い込んで……」

「……水嶋さん」

「お母さんと、生まれてまだ半年くらい妹と三人でお出かけしていて、事情を知らない近所の人から、妹に対して『お姉ちゃんがこんなに可愛いんだから、この子もさぞ可愛くなるでしょうね』って言われた時、お母さんの笑顔が引きつったような気がしたの。うん、分かっているの。お母さんはやさしくて、私と妹に分け隔て

なく接してくれる、とても素敵な人なの。私の勝手な思い込みが、お母さんの笑顔を引きつらせて見せたんだってことは分かっているの。でも、私は妹より可愛くちゃいけないんだって、自分で思い込んでしまっただけ……」

「それから、私、おしゃれに無頓着な振りをし始めたの。髪型にもファッションにも無関心な女の子であれば可愛いはずがないって思っただけ……」

「だからなのね。その髪型」

「うん。この三つ編みは小学校四年生からずっと……。小学校六年生の時には近視になって眼鏡を掛けることになったんだけど、一番女の子が掛けそうにない、今と同じようなデザインのものを選んだの」

確かにナオが掛けている眼鏡は、男性が掛けるような銀縁眼鏡だった。

「私が中学生になる時、丁度、お父さんが転勤になって福岡に行くことになったの。お母さんも、たぶん気づいていたんだと思う。自分と妹のことで私が悩んでいるって。だから、お父さんとお母さんが相談して、丁度、中学生という思春期の頃だということもあって、私はお母さん達と別れて、お父さんと一緒に福岡に引っ越すことになったの」

「別れて暮らしてみてもうだった？」

「なんか、お父さんを取り戻したって感じで嬉しかった。本当のお母さんはいないけど、本当の家族だけで生活しているって感じだった。学校で友達もできて、女の子同士でバンドを組んで活動したり、中学校時代は、本当に楽しかった」

「中学校時代もその格好ですごしたの？」

「別れて暮らしているっていつても、夏休みとか時々は行き来もあるし、お父さんもいつまた東京に戻ることになるか分からなかったから、思い切って変わることでできなかつた」

「それで、この四月になつて、また東京に戻つて来たつてことなんだ」

「うん。お父さんが本社勤務になつて、また四人で暮らすことになったの。お母さんは相変わらず妹と分け隔てなく接してくれるけど、やっぱり私は、自分が作つた壁を乗り越えることができなくて……。家にいると、なんだか息が詰まつてしまつて……」

「だから、学校が終わつてからも、ドールで道草してたんだ」

「うん」

「そうか。……なんか辛いことを思い出させちゃつたね。ごめんね」「いいえ」

レナの慰めの言葉には、繊細で優しいレナの気持ち溢れていて、ナオは本当にレナのこと好きになつた。

レナはしばらくやさしく微笑みながらナオを見つめていたが、一旦、視線を反らせた後、再び、ナオを見つめながら話を続けた。

「自分が可愛くちゃいけないというのは分かつたけど、それと軽音楽部に入部を決められないこととはどういう関係なの？」

「それは……、よく分からない」

「じゃあ、私が考えていることを言ってみましょうか。当たつているような気がするんだけどな」

「えっ、どんなこと？」

「あなたも気がついてるのよ。ひよつとしたら、カズホが好意を持ってくれているんじゃないかってね」

「えっ」

「もし軽音楽部に入つて、カズホと一緒にいる時間が長くなつてくると、カズホと特別な関係になるかもつて。でも、今のままの格好が、バンド活動やカズホの彼女としてふさわしいとはいえないつてことも分かつている。つまり、水嶋さんもカズホのことが好きなのよ。でも、今のままの自分を変えることができないから苦しんでいるのよ」

「……！」

(私が佐々木君のことを……。違っつて言えない)

レナとカズホが話している場面を見ただけで涙したこと。ドールでカズホと話をするのができないだけで寂しさに襲われること。カズホの笑顔を見たいといつも思っていること。それはカズホが好きだから。そう言えば全ての説明が付いた。本当は分かっていたのに、呪文に苦しめられないように、自分の気持ちに蓋をして考えないようにしていたのかも知れなかった。

「水嶋さん」

「はい」

「水嶋さんが、自分の悩みを打ち払うことは簡単よ。その格好を止めるだけ。誰に遠慮をすることもないわ。お母さんにだって妹さんにだって。ありのままの水嶋さんになれば良いじゃない」

「ありのままの私……」

「そう、それに私を含めて学校の他の女子にだって遠慮をすることはないよ。だって、あなたはカズホに選ばれた女の子なんだから」

「……！」

「もっと自分のことに自信を持つて。ずっと自分のことを『可愛くない』って思い込んできたから、本当に自分は可愛くないって思っているのかも知れないけれど、私に言わせれば、水嶋さんみたいに可愛い人は見たことないよ」

「そ、そんな……」

「その眼鏡を取って髪を下ろしてみる。たった、それだけで自分で作った殻から抜け出せる気がするけどなあ」

「……」

「今、私ができることはこれくらいかな。……ごめんね、えらそうなこと言っつて」

「うっん。……でも立花さんの言ったとおり、自分のこの気持ち、初めて口にして言っつてみたら、何だかちょっと身体が軽くなったみたい。……ありがとう、立花さん」

ナオのお礼の言葉に対して、レナがクスリと笑った。

「ねえ、考えてみれば私達、友達っていうような付き合いもまだしていないのに、いきなり悩み事を打ち明け合ったりしているんだよね。なんか不思議だね」

「確かに。ふふ、そうですね」

「水嶋さん。もう『立花さん』なんて他人行儀に呼ばないで。友達が呼んでいるように『レナ』って呼んで。お願い」

「それなら、私のことも『ナオ』って呼んでください」

「分かった。……ナオちゃん、今日の私のお願い、今すぐ返事をくれる必要はないからね。ナオちゃんにも解決しなければいけない課題が一杯あるんだもんね」

「うん。……レナちゃんって本当にやさしい人なんだね。こんなやさしいレナちゃんの良さが分からないなんて、佐々木君は何を見ているのかな」

「ほらほら。また、そうやって自分を置いていて人のことを心配しようとする。しかもそれを本心から言っているから、自分を苦しめることになるのよ。……でも、ナオちゃんのそんなところがカズホは好きなんだろうな。私みたいに裏表がないところがね」

「えっ、レナちゃんだって裏表ないですよ」

「うふふふ……。あゝあ。ナオちゃんともっと早く出会ってたらなあ。ナオちゃん、なんで一年の時からうちの高校に来なかったの？」

「えゝ、そんなこと私に言われても……」

ナオは、いきなりそんなことを言われて困ってしまい、俯いてもじもじするしかなかった。

「うふふふ。ナオちゃんって本当に可愛い！」

第六章 強まる絆

四月最後の週の月曜日。

二年一組の教室では、担任の平野が今週末の徒歩き大会について説明していた。

「今週の金曜日は、毎年恒例の徒歩き大会だ。男子と女子がお互いに励まし合って、十二キロ先のゴールを目指して休憩なしで歩くという、我が校伝統の行事だ。男子と女子のペアについては希望を受け付けるから、二人の希望が合った者は、明日の下校時間までに私まで申し出るように。ペアは別に学年やクラスが一緒でなくても良いから、兄弟なんかでも良いぞ。特に申し出がなければ私の方でラウンドに組み合わせを行う。組み合わせについての苦情は一切受け付けないからな」

「水嶋、一緒に歩こうぜ」

カズホが前の席から振り向きざまに言ってきた。

「えっ」

「このクラスの女子の中では、水嶋しかまともに話せる奴はいないからなあ」

「でも、他のクラスにはいるんじゃないですか？」

ナオの頭にはレナの顔が浮かんだ。

「えっ、俺と一緒に嫌か？」

「そ、そんなんじゃないんです。……本当に私なんかで良いんですか？」

「もちろん」

「……分かりました。あの、よろしくお願いします」

「平野には俺から言っておくよ」

その日の夕方。軽音楽部の部室では、マコト、カズホ、そして八ルが練習前のミーティングをしていた。もっとも話題は徒歩き大会のことで、マコトのグチにカズホが突っ込みを入れていた。

「しかし、かつたるいよな。今年もやるのかよ」

「伝統行事って言ってたじゃないか」

「伝統に縛られていると、新しいことが見えなくなってくるんだよ」

「突っ込みどころがないんだが」

「良いよ。別に突っ込んでくれなくても。ところでカズホはペアの

女子を決めたのか？ 確か、去年は上級生の女子から指名を受けて、やむなく一緒に歩いてきたもんなあ」

「今年の水嶋と一緒に歩くことにしたよ」

「ああ、あの三つ編み娘か。なんだ、やっぱり、けっこう仲良しなんじゃね？」

「違うって。他にこれといって一緒に歩きたいって女子がいなくて、消去法で水嶋になったってことだよ」

「ふうん。それじゃ、ハルは誰かとペアになったのか？」

「じ、実は、立花さんから誘われて一緒に歩くことになったんだ」

「レナと」

「ハルが？」

「やっぱり変かな」

「いや、レナのことだ。一緒に歩いて一番騒がれそうにない男子を選んだのかもな」

マコトが冷静に分析をした。

「うっ、自分でもそう思っているけど、人から言われるとなんか悔しい」

「そういうマコトはペアはできたのか？」

「いや。徒歩き大会自体、興味はないし、担任に適当に選んでもらうさ」

その時、たまたま二年生バンドの練習場所に機材を取りに来ていた一年生部員がマコトに声を掛けてきた。

「あ、あの、武田先輩」

「んっ、村上か。どうした？」

声を掛けてきたのは、一年三組の村上美香だった。新しく入部した一年生で、ギターを担当している、ショートカットで目が輝いている活発そうな女の子だった。

「あの、もしよろしかったら、私と一緒に歩いてもらえませんか？」

「えっ」

「武田先輩と、ギターのこととか色々と話をしたかったです。歩

きながら話ができたら良いなと思って……。あの、駄目ですか？」

マコトは、その容貌から怖い人というイメージがあり、女子のファンもいるのだが、カズホのように女子から声を掛けられることは今までなかったから、マコト自身、ちょっとびっくりしているようだった。

「い、いや。俺は全然OKだよ」

「本当ですか。良かった」

早速、カズホが茶々を入れる。

「マコトが女子から誘われるなんて、天変地異の前触れかな」

「うるせえ。でもまあ、三人とも知り合いでペアになったんだから、みんなで一緒に歩くか」

「そうだな。のんびりしゃべりながらでも行くか」

そして徒歩き大会当日。

全校生徒が参加するため、各学年ごとに時間差でスタートすることになっていた。異なる学年でペアを組んでいる場合は、どちらか上級生の学年でスタートすることになっており、マコトとミカのペアも、カズホとナオ、ハルとレナのペアと一緒にスタートすることになっていた。ちなみに二年生は青のジャージ、一年生は緑のジャージを着用と定められていたが、二年生グループに、ちらほら緑のジャージ姿も混じっていた。

マコトが、ナオとレナにミカを紹介していた。

「軽音楽部一年の村上だよ。今年はいつと一緒に歩くことになったんだ」

「一年三組の村上美香といいます。よろしくお願いします」

ミカはナオとレナに頭を下げた。

「二年一組の水嶋奈緒子です。よろしくお願いします」

「二年五組の立花麗菜です。よろしく」

レナは長い黒髪をポニーテールのように後ろで一つにまとめている。

「でも、村上さん、どうしてマコトと一緒に歩くことにしたの。マコトから脅迫された？」

「おい、レナ。知らない人が聞いたら本気にするような冗談は言わないように！」

「わ、私の方からお願いしたんです。ギターのこととか色々話を聞きたくて……」

「ああ、分かった分かった。そういうことにしておくわ」

「ちょっと待ったー。なんで後輩の言うことが信じられないかな。カズホ、何とか言ってみてやってくれよ」

「普段の言動からしてしょうがないだろ」

「カズホ！ お前もか」

「なに馬鹿のこと言ってるのよ」

レナは、このメンバーと一緒に行動できることが嬉しかったのか、なんとなくはしゃいでいるように見えた。レナは、マコトの三文芝居に突っ込んだ後、真面目に準備体操をしているナオにも茶々を入れてきた。

「ナオちゃん、入念に準備しているのね。実は密かに入賞を狙っているんじゃないの？」

ナオに対する突っ込みには、やはりカズホが突っ込み返してきた。

「レナ、冷静に考えてみるよ。水嶋だぞ。水嶋」

「あっ、それって私がいると絶対、入賞できないってことですか？」

「ナオちゃんって、運動、得意だったっけ？」

「うっ、得意かといわれると、得意じゃないです」

「ふふふ。まあ、六人でのんびり行きましょう」

「そ、そうですね」

ちゃっかりレナに賛同するナオであった。

二年生グループが出発した。

しかし、目を引く一団であった。全校女子の憧れの的であるカズホと、男子の憧れの的であるレナが、ペアは別としても一緒に歩い

ているのだから。またそれぞれのペアが冴えないルックスのナオとハルというギャップも興味を惹かれた。ミカも一年生の女子の中では男子に人気がある美少女だったし、マコトの存在感は群を抜いていた。こんな個性的な六人がグループを作っておしゃべりをしながらマイペースで歩いていたのだから、注目されないはずがなかった。ナオとレナは、つい最近、悩み事を打ち明け合って友達になったばかりなのに、ずっと前からの親友という感じで、他愛のないおしゃべりに夢中になっていた。

カズホとハルもバンドのリズム隊として共通する話題もあり、それぞれのペースで話をしていた。

マコトとミカはギターの話で盛り上がっていた。ミカも中学校時代にギターを始めており、一年以上の演奏経験を有していたから好きなギタリストの話や演奏技術の話など話は尽きることはなかった。

スタートして十キロ辺りまでは、そんな感じで和気あいあいと歩いていた一行であったが、十キロを越えた辺りで、さすがにみんな疲労の色が見えてきた。特に、ハルとナオは、見るからにバテバテになっていた。

レナが心配してハルに声を掛けた。

「北岡君、大丈夫？」

「だ、大丈夫。きよ、去年も完歩できたし……」

一方、カズホもナオが心配になり声を掛けた。

「水嶋、ちよつと休もうか？」

「あつ、いえ……平気です」

「ちつとも平気に見えないのだが」

一行は、無口になって黙々とゴールを目指して歩いていた。二人ともまだ元気なマコトとミカが先頭を歩き、その後をレナとハルが、そしてナオとカズホが追っていた。

もともと運動が得意ではないナオは、中学の時のマラソン大会で

も最終組でゴールした。今回は、レナ達と話しながらのんびり歩いてきたが、やっぱり十キロを越えると疲労はピークに達したようだった。

(みんなに迷惑を掛けちゃいけないし、頑張らねば)

自分を励ましながら黙々と歩いていたが、やはり足が上がりなくなっていた。残り一キロを切った地点に差し掛かった時、ちよつとした窪みに足を取られて、バランスを崩した。

「あつ」

ナオは、右横を歩いていたカズホの方に転びそうになったが、咄嗟にカズホがナオを抱きかかえてくれた。

「大丈夫か？ 水嶋」

「ごめんなさい。痛たっ！」

ナオの右足首に激痛が走った。

「どうした？」

「足が……」

すぐ前を歩いていたレナが気がついて飛んで来ると、ナオの足下にしゃがんだ。

「ナオちゃん、どっちの足が痛い？」

「右が……」

「靴を脱がせるよ。カズホ。ナオちゃんを支えてあげて」

「分かった」

カズホは、ナオの左側に回って、後ろからナオの両肩を両手で支えてくれた。ナオも左手でカズホの肩に手を掛けて左足だけでバランスを保つようにして立った。

レナが、ナオの右足の靴と靴下を脱がせて、内出血や腫れがないかを確認していた。

「ちよつと動かすよ」

「あつ、痛い」

「ちよつとくるぶしが腫れてきているみたい。たぶん捻挫だと思う。骨にまでは異常はないと思うけど……」

マコト達もナオの周りに集まって来た。マコトが心配そうにナオに声を掛けた。

「大丈夫か？ 水嶋」

「ごめんなさい。大丈夫です。命に別状はないと思いますから」

「いや、そこまで大袈裟に心配はしてねえけどよ」

ナオのボケは緊迫した空気を和らげたようだ。

「しかし、カズホ、どうする。ここから棄権するか？ たぶんゴールはそんなに遠くないから、俺たちが先に行つて先生に伝えてこようか？」

「そうだなあ……」

「あの、私のために皆さんにご迷惑をお掛けするわけにはいきませんから、皆さんは先に行つてください」

「それじゃ、ナオちゃんはどうするつもり？」

「大丈夫です。休み休み歩きます。佐々木君には申し訳ないですけど」

「俺のことなら心配しないで良いから」

「私達のことにも心配しないで良いから。ここまで一緒に歩いて来たんだから一緒にゴールしようよ」

「そうだな。そうしようぜ。水嶋」

つい最近知り合ったばかりなのに、ナオを仲間として接してくれて、けつして見捨てようとしなないマコトやレナの態度に、ナオは感激しつつ、感謝の気持ちで一杯になった。

「すみません、皆さん」

「しかし、休み休みついても、すぐには歩かない方が良いんじゃないか？」

「そうね。ちゃんと治療しないで歩くと悪化しちゃうかも知れないし……」

マコトとレナが、ナオのことを心配して話していたが、次の瞬間、レナは何か閃いたようだった。

「そうだ！」

みんながレナに注目すると、レナは小悪魔的な笑顔を見せてカズホに言った。

「残りは一キ口を切っているくらいだから、カズホがナオちゃんをゴールまでおぶってあげたら。ペアなんだから」

「えっ、俺が水嶋を……」

「そ、そんな。佐々木君にご迷惑を掛けるわけにはいきません」

「別に迷惑じゃないから。ねえ、カズホ」

レナはカズホの返事が分かっていたようだ。

「ああ、全然、迷惑なんかじゃないよ」

「決まり！ そうしよう」

「水嶋、それじゃあ」

カズホがナオに背を向けてしゃがみ込んだ。

「でも……」

「ナオちゃん。早くしないと、みんなのゴールがそれだけ遅れてしまつて、そつちの方がみんなの迷惑かもよ」

レナがやさしく諭すようにナオに言った。

しばらく躊躇したナオであつたが、他に選択肢がないと知り、カズホの背に身体を預けた。

「すみません」

「よいしょつと。あれ、水嶋ってやつぱり軽いんだな」

「そ、そんな……」

ナオは顔を真っ赤にさせながら、カズホにおんぶされた。

「カズホ。カズホがばてたら、俺が代わってやるからな」

「マコト、なんか下心があるんじゃないの？」

「おい、レナ。なんで純粹に友を思う俺の気持ちを邪推するかな」

「はいはい。とにかく行きましょう。カズホ、OK？」

「ああ、大丈夫だよ」

六人は、再び歩き出した。マコト達は後ろからナオ達を見守るように歩いていた。

ナオは、スリムに見えるカズホの背中が意外に広いことに気づい

た。また、カズホの身体が髪が分からなかったが、ほのかに良い香りかしていた。

「あの、佐々木君」

「んっ、どうした？」

「本当にごめんなさい」

「気にするなよ。それにさっきも言ったけど、水嶋って軽いから苦にならないし」

「そ、そんなに軽いですか？」

「ああ。やっぱり背中からなんか漏れているんじゃないのか？」

「そ、そんな……。あつ、でも注意力が漏れていたかも知れませんがははは」

その時、ナオは、周りを歩く生徒達の視線に気がついた。妬みや興味本位に満ちた視線がナオに向けられていた。中にはヒソヒソと話しながら通り過ぎていく生徒達もいた。ナオは怖れていた「四面楚歌」に陥っているような気持ちになってしまった。

「マコト」

「んっ？」

ふいにレナがちょっとだけ速度を速めてカズホの前に出たかと思うと、そのままカズホの前を歩き出した。

それだけで、マコトもレナの意図が分かったようだった。マコトもカズホの左側に行き、カズホと並んで歩き出した。二人の行動を見て、ハルも自らカズホの右側に行き、カズホと並んで歩き出した。カズホの後には、ミカが引き続き歩いていた。みんながカズホを取り囲むようにして歩き出した。特にマコトの威圧感は効果抜群だった。

（みんな……）

ナオは、変な中傷は許さないという無言の盾がナオを守ってくれているように見えた。ナオが涙ぐんでいたのは、もちろん足が痛かったからではなかった。

「四面」で鳴り響いていた「楚歌」はミュートされた。少なくとも

も、ナオがカズホにおんぶされたいがために「わざと」足を挫いたなどという根拠のない噂が広がることはなかった。

結局、ゴールまで、カズホがナオをおんぶして行き、六人は一緒にゴールをした。ゴール後、ナオは保健室の先生に右足を診てもらったが、軽い捻挫ということで湿布とテーピングをただけで済んだ。

翌日の土曜日からゴールデンウィークが始まったことから、ナオはミエコ達から質問攻めにされることはなかった。

ゴールデンウィーク中、ナオは、居づらい自宅にずっと居たこともあり、また、カズホと会えなかったことから、ずっとブルーな気分だった。

しかし、ゴールデンウィークが明けて、いつもどおりの日常が始まり、ドールでのカズホとのおしゃべりタイムが復活すると、そんな気分はすぐに吹き飛んでしまった。

カズホと会えないだけで辛い思いをするということを再認識したナオは、カズホに対する想いをますます強めていった。レナから言われたことも後押しをした。

（『あなたはカズホに選ばれた女の子なのよ』とレナちゃんは言った。本当にそうなんだろうか？ でも、それが本当だったら……嬉しい）

いつもどおり、そんな時にはナオの頭に例の呪文が響き渡った。だが、今のナオは、その呪文に妄信的に束縛されることはなかった。その呪文を打破しようとしている自分がいることに気がついた。カズホやレナの言葉に勇気付けられていることは明らかだった。

しかし、ナオが、それまでの自分と別れを告げて、本当の自分に変わることができるには、まだ何か足りなかった。

そんな五月のある日の昼休み。

ナオは、いつもどおり、教室でミエコとハルカと一緒に弁当を

食べていた。一週間後にハルカの誕生日があり、三人でミニパーティーをしようという話題で盛り上がった時、ミエコが、ふと思いついたかのように言った。

「そういえば、明日は佐々木君の誕生日のはずなんだよね」

「えっ、そうなの」

ナオは、昨日もドールでカズホと会っていたのに、カズホからそんな話は聞いていなかった。ハルカも不思議そうにミエコに訊いた。「ミエコ。どうして佐々木君の誕生日を知っているの？」

「知らない方がおかしいよ。本当にここの生徒ですか？ 明日はたぶん、ここにもいっぱい人が来るよ」

「どうして？」

「明日になれば分かるって」

ナオは、誕生日を知らせてくれなかったカズホが水くさいと思っただが、よく考えると積極的に自分の誕生日を言うことは、プレゼントをねだっているみたいだと思い、カズホなら言わないだろうなと思いついて、一人納得した。

その日の夕方。

ナオは、ドールでカズホを待っている間、カズホに誕生日プレゼントを渡したいと思い立った。今まで、義理でも男の子にプレゼントを渡したことはなかったが、カズホの誕生日は、自分にとって、すごく大事な日のような気がしてきて、一緒にお祝いをしたくなかった。

カズホがドールにやって来ると、ナオはすぐにカズホに訊いた。

「あ、あの、佐々木君」

「なに？」

「明日って、佐々木君の誕生日なの？」

「えっ、誰に聞いたんだ？」

「あの、クラスで話題になっていたから」

「そうか。……休もうかな、明日」

「えっ、どうして?」

「あっ、いや、冗談だって」

カズホは、本当に憂鬱そうだった。

「あ、あの、佐々木君」

「んっ?」

「わ、私も誕生日プレゼント、あげたいなって思っているんだけど、う、受け取ってもらえますか?」

ナオは、なんか照れくさくてモジモジしながら訊いた。

「水嶋が、俺に?」

「はい。……あ、あの、いらないうって言うのなら自粛します」

「いや、水嶋がプレゼントしてくれるっていうのなら喜んで受け取るよ」

「ほ、本当ですか?」

「ああ」

「ありがとうございます」

ナオはニコニコしながらカズホに頭を下げた。

「なんでプレゼント渡す方がお礼言ってんだよ」

「あっ、……そうですね。えへっ。……あの、佐々木君。何が良いですか?」

「はあ? プレゼントのリクエスト訊かれたの初めてだよ」

「そ、そうなんですか。……すみません。私、男の子にプレゼント渡すの初めてで、いったい何が良いのか、よく分からないものから……」

「水嶋が選んでくれたものなら何でも嬉しいよ」

「……分かりました。でも、こんなプレゼントは困るってものはないですか?」

「そうだなあ。持つてるだけで逮捕されちゃう物とか、ぼかしを入れないと見られない物とか、ホラー映画の殺人鬼がよく持っているような物とかは嫌だな」

「そ、そんなプレゼント、どこで売っているんですか?。チェンソ

「とかラッピングしてくれる所があるんですか？」
「ははは。だから、それ以外だったら何でも良いよ」
「もう〜」

ドールを出て、ナオは、駅前のショッピングセンター内のおしゃれな雑貨屋に立ち寄った。

(でも、何をプレゼントすれば良いのかな?)

女の子の友達には、何回か誕生日プレゼントを渡したことがあるから、同じように可愛い雑貨でも良いかなと思った。

(これなら喜んでくれるかな? あっ、でもこっちのも可愛い)

色々を選んでみるだけでも楽しかった。

(あっ、これ……。うん、これにしよう)

次の日。

二年一組のカズホの席には、入れ替わり立ち替わり、女の子がやって来て、プレゼントをカズホに渡していた。ナオがざっと数えただけでも二十人以上はいた。女子高生が贈るものだから、それほど高価な物はないだろうが、どれも綺麗にラッピングされており、中にはメッセージ付きのものもあった。

カズホは、一応は「ありがとな」とお礼を言いつつプレゼントを受け取っていたが、後ろの席で見ていたナオには、かなり辟易した感じに見えた。

昼休みに、カズホはもらったプレゼントを持って消えたが、午後、教室に戻って来た時にはプレゼントは持っていなかった。置き場所に困って部室に置いてきたようだ。

ナオは、あのプレゼントの山を見て、自分のプレゼントにカズホが喜んでくれるか、ちょっと自信を失いかけていたが、昨日、カズホと約束したんだから、ちゃんと渡そうと改めて心に決めた。

ナオは、その日ほど放課後が待ち遠しいことはなかった。みんな

と同じように教室で渡すことができたらという気持ちにもなったが、ドールで二人きりである時にプレゼントを渡すことができると思えば、我慢のしがいもあった。

放課後。カズホは軽音楽部の練習が終わらないと来ないはずなのに、ナオは最短のラップタイムでドールに着いた。

「こんにちは」

「ナオちゃん。いらっしやい」

「今日もカフェオレ、お願いします」

「はい」

ナオは、いつもの席に座ると、鞆からカズホに渡すプレゼントを出した。綺麗にラッピングした小箱は昨日、雑貨屋さんで買ったもの。もう一つのリボンで結んだ袋は、手作りクッキーであった。

ナオが、テーブルの上で、ラッピングが乱れていないかチェックしていると、マスターがお冷やを持ってきた。

「カズホへのプレゼントかな？」

「あっ、は、はい」

マスターは、ニコニコしながらカウンターに戻って行った。

部室で練習中だったカズホの携帯電話が鳴った。発信先を見ると、母親が勤めている生命保険会社から掛かっていた。カズホは急いで電話に出た。

「佐々木一穂様の携帯電話でしょうか？」

「はい。そうです」

「こちら東京生命美郷営業所の広田と申します。お母様の佐々木雅美さんが交通事故に遭われて、今、救急車で美郷総合病院に運ばれていると連絡が入りました」

「えっ！」

いつもクールなカズホが大声を出したことに、マコトとハルの方がびっくりしていた。

「マコト。練習は中止だ。俺、すぐに行かなきゃ」

美郷総合病院だと走って十分ほどの距離だ。カズホは全力疾走で病院に向かった。

病院に着くと、母親は既に病室に入っていると告げられた。嫌な予感がしたが、気持ちを落ち着かせながら、病室の前までやって来た。ドアをノックする。

「どうぞ」

その声を聞いて、カズホは体中の力が抜けた。ドアを開けると、腕や足に包帯を巻いたり絆創膏を貼った母親がベットに座っていた。「なんだよ。びっくりさせるなよ。人工呼吸器なんかが付いてて寝たきりになっているのかと思っただぜ」

「ははは。お母さんの身体もけっこう頑丈だったみたいだよ」

「いったいどうしたんだよ？」

「原付バイクでお得意様回りをしていただけで、急に猫が飛び出してきて、それにビツクリして転んじやったのよ」

「で、怪我はどうなんだ？」

「骨は折れてないって。擦り傷くらい。ヘルメットをかぶっていたけど、頭を打ったから、これからすぐに精密検査をするのよ」

「そ、そうなのか」

そこに看護師がやって来た。カズホも脳検査室について行った。

いつもカズホが来る時間になっても、カズホはドールに來なかつた。マスターも心配になったのか、独り言のように「遅いなあ」と呟いた。

ナオはじっと待っていたが、ついにカズホのバイトが始まる午後七時になってもカズホは現れなかった。

ナオは、これ以上待っていることが辛くなり、席を立ってカウンターの中にいるマスターに小さな声で話し掛けた。

「マスター。今日はもう帰ります」

「そうですか」

「あ、あの、マスター。このプレゼント、預かってもらえませんか」

ナオはカズホへの誕生日プレゼントをマスターに差し出したが、マスターは受け取るうとはしなかった。

「どうしてですか？」

「佐々木君のことだから、どんなに遅くなっても、ここには絶対来ると思っています。だからマスターから渡してあげてください」

「明日、渡したらどうですか？」

「誕生日プレゼントだから、できれば今日、渡したいんです」

「私は受け取れませんね」

「えっ」

「私がそれを受け取って、カズホに渡したとしたら、それはただの物をあげることになるでしょう。でも、ナオちゃんがカズホにあげたいのは物だけではないでしょう？」

「……！」

「あのカズホのことだ。今日、ここに来なかったことは何か理由があるんですよ。大丈夫。明日、渡したって、ナオちゃんの気持ちはカズホにはちゃんと伝わりますよ」

「……マスター」

カズホと母親は、診察室で医師の説明を受けていた。どうやら脳にも異常はないようだった。しかし大事を取って、今日一晩は病院に泊まることとした。

「やれやれ、どうなることかと思っただぜ」

「ごめんよ、カズホ。心配掛けて」

と言いつつも、普段は忙しくて平日に息子と一緒にいる時間が取れない母親は嬉しそうだった。

「それじゃあ、俺、もう帰るぜ。バイトの時間もあるからな」

「そうだ、カズホ。お前、晩ご飯食べているのかい？ この病院の食堂で一緒に食べようよ」

食事のことを言われて、カズホはドールのこと、というよりナオのことを思い出した。

「お袋、悪い。俺、すぐに行かなきゃ」

カズホは急いで病院を出た。

すぐに携帯電話を取り出すのが、よく考えるとナオの携帯番号はまだ知らなかった。急いでドールに電話を掛けた。

「はい。喫茶ドールです」

聞き慣れたマスターの声だった。

「マスター。俺、カズホです。水嶋、来てないですか？」

「ああ、カズホ。ナオちゃんは、今、帰ったところだよ」

「……そう」

「カズホに渡したいものがあるって言っていたよ」

「……分かった。ありがとう」

電話を切ったカズホは、なにか取り返しのつかないことをしてしまっただよな気がした。

（水嶋に謝らなきゃ。でも水嶋の連絡先は分からないし……）

結局、なすすべもなく、カズホは気持ちを切り替えて、バイトに行くことにした。

（仕方がない。明日、水嶋に謝ろう）

ドールを出たナオは、カズホがなぜ来てくれなかったのか考えていた。

（あれだけプレゼントもらったんだから、もう、プレゼントはいらないって思ったのかな？）

昼間のプレゼント攻撃を思い出し、そんなことを考えた。

（ううん。もし、そうだとしても佐々木君はハッキリ言ってくれはす。約束しておいて来ないというような人じゃない）

駅に向かって、重い足取りを引きずりながら歩いていると、急に雨が降ってきた。慌てて近くの商店の軒先に雨宿りしたナオが、周りをよく見ると、そこはドールから駅に向かって、ナオがいつも通っている道ではなかった。どうやら考え事をしながら歩いていたことから、一つ通りを間違っただよだ。

遠くには立花楽器店の看板が見えた。ナオは、惹き付けられるように、立花楽器店まで雨の中を走った。

店内に入り、リペアコーナーを探し出したが、そこにはカズホはおらず、中年の男性が一人で作業をしていた。ナオは意を決してその男性に問い掛けた。

「あの、すみません」

男性は作業を中断し、不機嫌そうに顔を上げた。

「リペア依頼かい？」

「いいえ、……あ、あの、佐々木君は今日はいらっしゃらないんですか？」

「カズホなら、ちょっと遅れるって連絡があったよ」

「そ、そうですか」

無愛想な男性の態度にナオは気後れしてしまった。そんなナオに男性は表情を変えることなく訊いてきた。

「お嬢ちゃんはカズホの彼女かい？」

「い、いいえ。違います。ただの同級生です」

「ただの同級生……。そうかい」

「あ、あの、ありがとうございました」

ナオは男性に頭を下げて、リペアコーナーから楽器展示スペースに移動した。

（遅れるって連絡があったっていうことは、佐々木君はここにやって来るということだね。プレゼントを渡せるかも……）

しかし、まだ客が大勢いる楽器店でカズホにプレゼントを渡すことはできないと思い、楽器店の外に出たが、楽器店の前でボーッと立って待っているのも、これまた店に迷惑を掛けると思い、ナオは、楽器店の向かいにあり、既にシャッターが降りているクリーニング店の軒先まで走って行った。

クリーニング店の軒先で雨をしのぎながら、ナオは、プレゼントを入れた袋を鞆から取り出し、胸の前で両手で握りしめた。

（やっぱり、今日、渡したい）

ナオはカズホを待つことにした。
雨はしとしとと降り続いていた。

しばらくして、カズホが雨に濡れながら、走って楽器店までやって来ているのが見えた。

(佐々木君！)

ナオは、クリーニング店の軒先から通りに出て、カズホを待った。カズホはナオに気がついたようで、ナオの方に向きを変え、走ってやって来た。

「何やってんだ、水嶋。濡れているじゃないか」

ナオは、カズホの姿が見えただけで嬉しくて軒先から飛び出していたことに気がついていなかった。カズホはナオをクリーニング店の軒先まで押し戻した。

二人は薄暗いクリーニング店の軒先で見つめ合った。走って来たカズホは息が切れていたが、初めに口を開いたのはカズホの方だった。

「水嶋、悪い。約束をすっぱかしてしまってた」

カズホは、ナオに頭を下げた。

「あつ、良いんです。ちゃんと会えたから……」

「水嶋……。何でドールに来なかったのか、俺を責めないのか？」

「佐々木君のことだもん。きつと何か理由があったんだよね」

「あ、ああ。実はお袋が交通事故に遭って」

「えっ！　だ、大丈夫なんですか？」

「ああ。今まで病院にいたけど、ピンピンしているよ」

「そうだったんですか。……ごめんなさい。そんな時に……」

「何言っているんだよ。水嶋が謝るようなことは何も無いじゃん」

「でも、私、ちょっと佐々木君のことを疑ってしまってた……」

「疑ってた？」

「誕生日プレゼント、いっぱいもらってたから、私のプレゼントなんかもう良いやって。だから……」

「俺、昨日言ったはずだぞ。水嶋がくれるプレゼントは何だって嬉

しいって……」

「……」

「ずっと待っていてくれたのか？」

ナオはコクリと無言で頷いた。

「このままじゃ、風邪を引いちゃうぞ。どっか暖かい所に行こう。ちよつと、ここで待っていてくれ」

カズホは、雨の中を走って向かいの立花楽器店に入ってしまった。

カズホは、リペアコーナーに行き、チーフの川村に今日はバイトを休ませてくれと頼んだ。

「ああ、良いよ。今、丁度、暇だからな」

調整待ちの楽器がいくつも置いてあったが、川村はいつもどおりの調子で答えた。そして、濡れているカズホを見て、リペアコーナーの壁に立て掛けていた傘を指さしながら言った。

「カズホ。お前、傘、持っていないだろ。俺の置き傘だから、それ持ってけ。俺はもう一つ持っているから。その傘、大きいからな。二人で入っても大丈夫だぜ」

再び楽器店から出て来たカズホは、黒地に黄色で「川村」と大きく書かれた傘を差していた。

「バイト、休みをもらってきたよ。水嶋、とりあえず行こう」

「あの、傘は一つだけなんですか？」

「そうだよ。借り物だからな。さあ、早く、身体が冷えちゃうだろ」

「は、はい」

ナオは、カズホの傘に入って一緒に歩き出した。

「とりあえず駅の方に行ってみよう。水嶋、もっとこっちに寄らないと濡れちゃうぞ」

「は、はい」

ナオは顔を真っ赤にしながらもカズホに寄り添うと、カズホがナオの方に傘を差し出した。

「あつ、あんまり私の方に傘を持ってくると佐々木君が濡れてしま
いますよ」

「俺は大丈夫だって」

ナオは、雨に濡れて冷えていたはずなのに、カズホのやさしさが
伝わってきたのか、ポカポカになってきた。

二人は駅前のファミレスに入った。

「そういえば、俺、今日の晩飯食いそびれていたんだった。水嶋も
食べてないんだろ。一緒に食べようぜ」

「あつ、でも、家に用意しているはずだから」

「そうか。……それじゃあ、いつもどおり俺だけ食べちゃって良い
か？」

「はい、どうぞ」

注文が終わりウエイトレスが下がって二人きりになると、ナオは
鞆からプレゼントを出した。

「あ、あの、佐々木君。誕生日……おめでとう」

朝からずっと楽しみにしていたはずなのに、いざプレゼントを渡
す時になったら、やっぱりちょっと照れくさくて、ナオは、俯き加
減の顔を赤くしながら、両手でテーブルの上にプレゼントを差し出
した。

「あつ、ありがとう。……開けて良いか？」

「う、うん。ちょっと雨に濡れちゃったけど……」

確かにラッピングがちょっと乱れていたが、カズホは、そんなこ
とは気にしていないように丁寧に箱を開けた。中にはミニチュアの
コントラバスが付いたストラップが入っていた。

「佐々木君にぴったりかなって思ってた……」

「ありがとう、水嶋。……そっちはなんだ？」

カズホがリボンを掛けた袋を指さした。

「こ、これはクッキーを作ってきたんだけど、雨に濡れちゃったか
ら……」

カズホがリボンをはずして袋の中からクッキーを取り出すと、クッキーもコントラバスの形をしていた。

「どれどれ」

カズホはクッキーを一口に入れた。

「あつ、佐々木君。ベトベトしておいしくない……」

「うまいじゃん。雨に濡れててもこんなにうまいのなら、雨に濡れていないクッキーを食べてたら、今頃、俺のほっぺたが落ちていたかもな」

「そ、そんな……」

「水嶋」

「はい」

「本当にありがとうな。今までもらった誕生日プレゼントの中で一番嬉しいよ」

「……う、うん」

カズホのお礼の言葉と笑顔は、今日、色々あったことをすべて忘れさせてくれた。ナオは、ちょっと涙ぐみながらも、カズホに微笑みを返した。

「あつ、そうだ。水嶋、携帯持ってる？」

「はい」

「電話番号とメールアドレスとこうぜ。今日みたいなことがないようにさ」

「えっ」

「駄目か？」

「駄目じゃないです」

ナオの携帯についても、登録の作業は機械音痴のナオに代わってカズホがやってくれた。

「ほい。これでOK。電話帳には『佐々木一穂』で入れたけど大丈夫か？ お父さんあたりからチェックが入るんじゃないかね？」

「大丈夫です。それでも親からは信用されていますから」

「おお、すげえ自信。それじゃあ、いかにも怪しい名前にしとくか。」

『佐々木権左右衛門』ってどうだ？」

「誰ですか、それ」

「それじゃあ、『佐々木小次郎』にしとくか？」

「ツバメ返して返信するんですか」

「じゃあ『世界の佐々木』は？」

「電話番号に三が付いたら馬鹿になるんですか」

「水嶋。お前、突っ込みのセンスも洗練されてきたなあ」

「そ、それって女の子に対する褒め言葉ですか」

「あははは」

「うふふふ」

二人は一緒に吹き出した。

注文した食事と飲み物が運ばれて来てから、カズホがナオに言った。

「俺のメアド。女の子で知らせているのは水嶋だけなんだ」

「えっ」

「今年の初めくらいだったかな。前のメアドがなぜか、ばれちゃつてさ。知らない女の子から山のようにメールが来るようになったから、メアド変えたんだよ」

「レナちゃんも知らないんですか？」

「ああ、電話番号は知っているけど、変更後のメアドは知らせていない。今のメアド知っているのは、マコトとハルだけかな」

「そ、そうなんですか」

「もつとも、その二人からメールが来たことはないけどな。マコトは、電話の方が早いつて絶対メールを使わないから」

「武田君らしいです」

「だから、俺もあんまりメールつてやったことはないんだけど、水嶋にはたまに送っても良いか？」

「は、はい。でも、私も、どちらかという電話派なので、あまりメールとかしないうすけど……」

「そうだな。水嶋とは、ドールで嫌というほど話しているから、メ

ールを使うのは、今日のような緊急の時くらいかな。やっぱり、直接、相手の声を聞きながら、何かを伝える方が良いよな。もつと言うと、直接、会って話すのが一番だな」

「はい。佐々木君とは顔を見ながら話が見たいです。……あっ」
言った後で、ナオは何だかすごく恥ずかしくなってしまった。

「んっ、どうした？　すごく顔が赤いけど……。熱でも出てきたんじゃないか？」

「いいえ、……大丈夫です」

ファミレスを出ると雨はあがっていた。駅の改札に向かいながら、カズホはナオに訊いた。

「水嶋。運命って信じるか？」

「運命？」

「ああ、今日だって、会えない可能性の方が高かっただろう。でもちゃんと水嶋と会えた。やっぱり運命の赤い糸ってあるのかな？」

「……まだ、分からないです」

「そうだな。……なんか俺には似合わない乙女チックなこと言っちゃったなあ。我ながらちよつと照れるな」

「うふふ」

改札口に着くと、二人は足を止めて自然に見つめ合った。

「水嶋。今日は本当にありがとう。今日の埋め合わせは必ずするよ」

「えっ、そんな……。良いですよ」

「でも水嶋に迷惑掛けたからなあ。何かお返しをしないと俺の気が済まないし」

「……」

「何でも良いから言ってくれよ。なんだってするぜ」

「でも……。あっ」

「んっ、なんか思い付いたのか。なんだ？」

「あ、あの……。その、それじゃ今度は、私の誕生日に、また二人で会ってもらえますか？」

「水嶋の誕生日っていつだ？」

「三月なんですけど」

「まだ、だいぶ先じゃん。でも約束するよ」

「本当ですか？」

「ああ」

「ありがとう。……それじゃあ帰りますね」

「ああ、気を付けて」

「さよなら」

ナオは改札を入り、振り返って胸の前で小さく手を振った。カズホはニコニコしながら、顔の横で手を振ってくれた。

ナオは、振り返りホームに上る階段の手前まで行って、再び改札口の方に振り向くと、またカズホが手を振ってくれた。ナオも今度は顔の横で大きく手を振った。

第七章 解かれた呪縛

ナオとカズホは少しずつではあるが着実に親密になっていった。しかし、そのことでナオは、家庭の問題、そしてレナから頼まれたバンドの問題を、知らず知らず先送りになっていた。カズホと毎日ドールで会って話ができるという今の状態で十分幸せを感じていたからだ。

一方、軽音楽部の二年生バンド。ドラマーも見つかって一応練習もしているが、ボーカルが見つからず、いまいちモチベーションが上がらなかった。

そんなある日の放課後。

部室にいたマコトの携帯にショーコから電話が掛かってきた。

「ああ、マコト。久しぶり」

「ショーコさん。どうしたんですか？」

「風の便りに、伽羅が消滅したって聞いてさあ。元気にしているかなって思ってたね」

「相変わらず地獄耳すねえ。とりあえず新しいドラマーが加入してくれたので、一応、バンドとしては活動できていますけどね」

「本当？ 久しぶりにマコトのギターとカズホのベースを聴きたくなつたから、また、顔を出してみようかな」

「どうぞどうぞ。歓迎しますよ。一年生も四人入部してくれてバンド組んでいるから、聴いてやってよ」

「そうか。明日とか大丈夫かな？」

「全然、大丈夫すよ」

「分かった。それじゃあ、明日午後五時くらいに部室にお邪魔するよ」

「了解。お待ちしています」

翌日、シヨークは自分のバンドのメンバーを引き連れて、軽音楽部の部室にやって来た。

「ギターのヒロコと、ベースのカズミだよ。どちらかというマコトとカズホの演奏を聴かせに連れて来たのよ。参考になると思っ
ね」

「よろしく」

「噂はかねがね聞いているよ。年下だろうと上手いプレイヤーの演奏は参考にしないとね」

「そうなんすか。ははは……。後で一年生バンドの指導をお願いして良いすか？」

「もちろん。一応、先輩面させていただけかないとね」

その時、マコトは、遠慮がちに部室のドアを開け、中を覗き込むようにして顔を見せたレナと目が合った。

「あれ、どうしたんだ？ レナ」

「シヨークさんにお会いしたいと思ってやって来たの。ハル君から、今日、シヨークさんが来るって聞いたから……」

「シヨークは私だけど……」

「あっ、こんにちわ」

レナは部室に入って来て、シヨールに丁寧にお辞儀をした。

「初めまして。二年五組の立花麗菜といます。実は軽音楽部の部員なんですけど、ちょっと事情があって休部中なんです」

「ああ、マコトとバンドをやっていた歌姫ってあなただったのね。で、私に何の御用？」

「あの、ちょっと二人だけでお話したいんですけど、よろしいですか？」

「ええ、良いわよ」

「中庭にベンチがあるので、そちらに移動していただいでよろしいですか？」

「OK」

新館と旧館に挟まれた中庭は庭園のように整備されており、いくつかベンチも設置されていた。部室を出たレナとシヨールはその中の一つに腰掛けた。

「すみません。でも、どうしてもシヨールさんに相談したいことがあつて……」

「初めてお会いするのに相談したいことって何かしら？」

「水嶋奈緒子ちゃんのことです」

「ナオちゃんのこと？」

「はい。そして、それは私のことでもあるんです」

しばらくして、レナはシヨールと一緒に部室に戻って来た。

「シヨールさん。レナと何を話していたんすか？」

「女の子だけの秘密の相談。マコトみたいに、がさつな男には関係ないのだ」

「ああ、そうすか」

「ところでマコト。今はどんな曲を練習しているの？」

「カズホが新しい曲を三曲作ってくれているので、それを練習しているんすよ」

「楽譜はある？」

「ありますよ。これです」

マコトはテーブルの上にあった楽譜をシヨールコに手渡した。

「ふん。……キーボードパートもあるんだ」

「ああ、それは将来に備えてってことなんすけど」

「入部してくれそうな子でもいるの？」

「それこそ、シヨールコさんの従兄弟の水嶋奈緒子って子ですよ。カズホと仲良しなんで、ひよっとしたら入部してくれるかもって期待しているんですけどね」

「ナオちゃんか。なかなかガードが堅いんじゃない？」

「そんな感じですね。シヨールコさんから言ってもやってくださいよ」

「分かった。この楽譜のコピーをもらえないかな？」

「えっ、……良いですけど、どうするんですか？」

「ナオちゃんに渡すことができれば渡しても良いかな？」

「ああ、それはもう。だけど受け取ってもらえますかね？」

「うん、まあ、私に任せて。レナちゃんも楽譜のコピーをもらえば」

「あっ、はい」

「まだ、詞は付いていないんでしょう。歌い手さんが自分の言葉で詞を付けるのが一番良いからね」

「……？」

マコトはシヨールコが言っていることが理解できなかったようだったが、レナはちよつと慌ててマコトに言った。

「ああ、マコト。私も、久しぶりにバンドでギターを鳴らしたくなつたのよ。この三曲、練習してくるから、今度、うちのスタジオで合わせてくれないかな？」

「えっ、レナが？……それは良いけど、どういう心境の変化？」

「シヨールコさんに色々と相談させてもらって、ちよつと吹っ切れたところもあって……。一回で良いから……。どうかな？」

「ああ、俺は大歓迎だぜ」

「土曜日の午後三時頃とかは、みんなの都合はどうかしら。三曲だけだから一時間ぐらいで良いよね」

「俺は大丈夫だ。カズホとハルはどうだろう？」

マコトは、ドラムが設置されている部屋の奥の方で、リズムセクションの打ち合わせをしていたカズホとハルにも都合を訊いた。

「土曜日はバイトもないし大丈夫だよ」

「僕も午後三時なら大丈夫」

「OK。じゃあ決まりね」

レナとシヨークは顔を見合わせてにつこりと笑った。

その日、ナオがいつもと同じようにドールで勉強をしていると、聞き慣れた声が後ろからナオを呼んだ。

「ナオちゃん」

振り向くとシヨークが立っていた。

「あれっ、シヨークちゃん。どうしたの？」

「実は、ナオちゃんに会いに来たんだよ」

「私に？」

シヨークは、いつもカズホが座っているナオの真ん前の席に座った。

「ナオちゃん。私が、今もバンドしていることって前に話したよね？」

「うん」

「同じ大学の女の子達でバンドを組んでいるの。それで、そのバンドで二週間後のイベントに出演する予定にしているんだ」

「へっ、すごいね」

「でね、今度の土曜日に最終の練習をやる予定なんだけど、キーボード担当の子がどうしても予定が立たなくて来れないっていうのよ。最後の練習だから、全パートを揃えて、練習がてらチェックをしたいんだ。だから、ナオちゃんに臨時でキーボードパートを演奏してもらえないかなって思って」

「えっ」

「イベントでの演奏だから、曲は三曲だけなの。楽譜もあるから、

今日から練習してもらえれば大丈夫でしょ。ライブに出演するんじゃないくて練習で合わせてもらうだけだから、完璧に憶えてくる必要もないからさ。ねっ、どうかな？」

「で、でも……」

「バンドでキーボードをやった時のナオちゃんは知らないけれど、小学校の時にピアノを弾いているのは、私も聴いてて知ってるから、全然、大丈夫だって。それに女の子だけのバンドだから……。お願い、ナオちゃん」

シヨークは、テーブルに手をついて頭を下げた。

「あつ、シヨークちゃん、止めてよ。……分かった。他ならぬシヨークちゃんの頼みだし」

「本当？ 助かるよ」

シヨークは満面の笑みを浮かべて顔を上げた。

「練習用の臨時メンバーだから、本当に気楽に参加してもらえば良いからさ」

「うん」

「練習する日は、今度の土曜日の午後三時から一時間だけけど大丈夫？」

「うん、土曜日は特に予定もないから」

「本当？ 良かった。それで場所は立花楽器店のAスタジオ。私の名前で予約しているからね」

「立花楽器……」

「行ったことある？」

「う、うん。あるよ」

「これが楽譜。コピーだから返してくれなくても良いからね」

そして土曜日。

ナオは、午後二時半には立花楽器店にやって来て、楽器の展示スペースを見て回っていた。以前、レナの部屋に行った時やカズホの誕生日に来た時は、ゆっくりと楽器を見る時間がなかったから、陳

列された新しい楽器を見るのは久しぶりだった。ピカピカの楽器を眺めていると、なんとなくワクワクするような気持ちになってきた。キーボードコーナーで最新の機種に見入っていると、後ろから声を掛けられた。

「ナオちゃん」

振り向くと、レナが立っていた。

「あっ、レナちゃん」

「今日はどうしたの？」

「う、うん。あの、従兄弟がどうしても言って言って、臨時のバンドメンバーとして練習することになって……。あっ、今日だけね」

「ふ〜ん。スタジオはAとBの二つがあるんだけど、どっち？」

「Aスタジオって言った」

「たぶん、他のメンバーは、もうスタジオに入っているんじゃないかな。私が案内してあげるわ」

「えっ、良いよ。自分で行けるから」

「これも立花楽器店のサービスだっていうことで……」

レナはニコニコ笑いながら、ナオを先導して来客用エレベーターに乗せ、二人で三階に上がった。エレベーターのドアが開くと、廊下が真っ直ぐ伸びており、その廊下に向かい合って密閉用防音扉があり、それぞれに「A」、「B」と大きく書かれていた。レナは、「A」と書かれた扉のノブを押し下げながら、中に入った。

「お待たせ」

「……？」

疑問に思いながらも、ナオはレナの後に付いてスタジオの中に入った。そこには、カズホ、マコト、そしてハルがいた。

「……！」

ナオは、今、自分の身に起きている事態がまったく理解できなかった。

「佐々木君。どうしてここに？」

「それはこっちのセリフだよ。水嶋こそどうして？」

カズホ達もナオが来たことを驚いているようだった。

レナは、スタジオの扉を閉めると振り向いて、ポケットから一通の便せんを取り出した。

「シヨールコさんからのメッセージを預かっているから読んでみて」
レナはちよつとバツが悪そうに便せんをナオに渡した。

カズホ達がナオの周りに集まって来て、便せんに書かれたシヨールコからのメッセージと一緒に読んだ。

「ナオちゃん。カズホ。マコト。それからハル君。ごめん。これは私が仕組んだ陰謀なのだ。ナオちゃんが、カズホ達のバンドとなかなか合わせてくれないという話をレナちゃんから聞いて、私が思い立って仕組んだことなの。ナオちゃん。ナオちゃんがこのメッセージを読んでいるっていうことは、スタジオの中でカズホ達と一緒にいるっていうことだよ。ナオちゃんなら絶対、大丈夫。だからもう逃げちゃ駄目。ナオちゃんだつて、このままで良いつて思っていないでしょ。カズホやレナちゃんは、ナオちゃんが閉じこもっている殻を必ず破つてくれるはずだよ。 追伸：今日は実際にその場において、こんな手段を採ったことをみんなに謝らなくてはいけないのだけど、レナちゃんが自分達だけで解決させるから今日は来ないでほしいつて言つたから、そこには行きません。私みたいな部外者がいない方が良く私も思つたからね。その分、後日、何らかの埋め合わせをするよ。それじゃ！ 祥子」

メッセージを読み終わつて、マコトが納得したように言った。

「シヨールコさんの陰謀だったのか。何か急に話が決まつたから変な気はしたんだよなあ」

ナオは、しばらく呆然としていたが、ふと、これまで自分が意図的に避けてきた状況に陥つていることに気がついた。

（駄目。佐々木君と一緒にバンドなんてできない……）

「あ、あの、私、帰ります」

ナオは振り返り、ドアのノブに手を掛け、スタジオを出ようとした。

「ナオちゃん！」

いつもより強いレナの口調に、ナオはその場に立ち尽くしてしま
った。

「シヨークさんも言っているでしょ。また逃げるの？ そのまま人
に遠慮をし続けたまま大人になるつもり？」

「……」

「何が怖い？ このスタジオの中には、徒歩き大会と一緒に歩い
た仲間しかいないわよ。他には誰もいない。誰に見られることもな
いの」

「……」

「それとも、このままバンドのメンバーになつてしまうことが怖い
の？ それなら大丈夫。わざと下手に演奏すれば良いだけ。そんな
やる気のないメンバーと一緒にやるって、マコト達はけつして言わ
ないから」

「……」

「もう、私達はスタンバイできているわ。ナオちゃんも練習をして
きているでしょう。そろそろ始めましょう。立花楽器店はね、ス
タジオの利用時間については厳しいことで有名なんだからね」

ナオは、スタジオの入り口付近に立ち尽くしていたが、レナが近
づいて来てナオの手を取った。レナは、先ほどの様子から一変して
優しく微笑みながら手を引いて、ナオをキーボードの前まで連れて
行った。

キーボードは既に電源が入っており、レナが音量や音色を素早く
調整してくれた。

「ナオちゃん。楽譜は？」

「鞆の中に……」

「見る？」

「……いいえ」

レナは、ナオから離れると、自分のテレキャスタータイプのエレ
キギターを持ち、アンプのボリュームを上げ、Aコードを一鳴りさ

せた。

スタジオ中に響き渡った硬くシャープな音が、キーボードの前で俯いて立ち尽くしていたナオの体を貫いた。その瞬間、今までナオを怯えさせていた呪文が一瞬消え去り、その呪文に束縛されていたナオと、音楽が大好きでバンドで演奏をしたいとずっと願っていたナオとが入れ替わった。

（私は……、私は……）

レナは、キーボードの前で俯いたまま立ち尽くしているナオが心配だったようだ。

「カズホ。カズホからも一言掛けてあげたら」

「あ、ああ」

俯いたままのナオはカズホの顔を見ることはできなかったが、いつものやさしいカズホの声は、掻き乱されていたナオの心を微風のように吹き抜けて行った。

「水嶋。とりあえず、俺たちは練習を始めるから、気持ちの整理が付いたら、いつでも参加してきてくれ。……マコト、やろう」

「お、おう。それじゃあ、一番の曲からやろうか」

まだ、詞も曲名もついていないオリジナル曲であり、番号で特定していたのだ。

「OK。ハル」

カツカツカツカツ。

乾いたスティックのカウントがスタジオに響いた。

次の瞬間、圧倒的な音の連鎖が始まった。ナオは、まるで津波のように、まず激烈な衝撃に体を打たれるとともに全身が音の渦に飲み込まれてしまった。そして、今まで聴いたことがないほどの高密度の音で満たされた空間に体が浮遊している錯覚を覚えた。

ナオは、俯き加減のまま、無意識に最初からキーボードを弾いていた。メンバー全員が演奏しながらも、驚いた様子でナオを見ていたが、それも束の間、おそらくメンバー全員がナオと同じような感覚を感じたのだろう、何かに取り憑かれたかのように演奏に夢中に

なっていた。

ナオは、ショーコから楽譜を渡された日のうちには、楽譜を見ずとも弾けるようになっていた。ナオは、キーボードの練習をしている時、中学校時代に感じていたようなワクワクするような気持ちを覚えていた。ショーコのバンドで演奏できることは、本当を言うとすごく楽しみだった。

今、一緒に演奏をしているのは、ショーコのバンドではなく、カズ達のバンドだったが、今のナオにとって、そんなことは、どうでも良いことになっていた。

(あんなに怖かったのに……。あんなに避けていたのに……)

指が自然に鍵盤の上を動いた。左足が自然にリズムを刻んだ。俯いて鍵盤を見つめていた顔が自然にカズホの方を向いた。カズホは笑顔でナオの方を見ながらベースを弾いていた。ナオも、ちよつと涙ぐみながらも笑顔を返した。

中学校時代のバンドとは明らかにレベルが違った。マコトのギター、カズホのベース、ハルのドラムが一体となり、それにレナのサイドギターとナオのキーボードが加わって、今日、初めて合わせて演奏したとは思えないようなグルーブ感を生み出していた。

メンバーはスタジオの中で輪になって演奏していたが、マコト、カズホ、そしてレナが、ドラムセットとその隣に設置されたキーボードの周りに集まって来て、自然にその輪が縮まってきた。メンバー全員がお互いの顔を見ながら、更に気分を高揚させているようだった。

ナオの右隣にいたレナは、時折、心配するようにナオの方を見ながらも、思いつ切りギターをかき鳴らし、時折、歌詞らしき言葉を口ずさんでいた。

マコトは、まるでライブをやっているような派手なアクションを見せ、ギターソロの時には、ナオの真ん前に移動してきて、ナオを煽るように演奏した。

カズホは、やはりナオのことが心配だったのか、アクションとア

アイコンタクトで、曲のキメとなる箇所を教えてくれていた。しかし、本当に楽しそうにベースを弾いているということはすぐに分かった。ナオの左隣では、ハルが嬉しくてたまらないという感じで笑いながらドラムを叩いていた。

ナオは、今まで悩んでいたことが、この瞬間、頭のどこからも消えていた。

曲が終わった。余韻を楽しむかのように、しばらく誰も言葉を発しなかった。静寂を破ったのはマコトだった。

「何だよ、これ。これまでバンドをやってきて、こんなに気持ち良かったのは初めてだぞ。カズホはどうだった？」

「ああ、そうだな。最高だよ。やっと伽羅の残骸から抜け出ることができたような気がするよ」

「僕もドラム叩いていて、こんなに幸福感を感じたことはないよ。バンドをやってて本当に良かったって感じだよ」

訊かれていないのに、ハルもどうしても感想を言いたかったようだ。

「ああ、そうだな。水嶋。お前、最高だよ。なんでもっと早く」

「ちよつと、みんな！ このスタジオ、一時間しか借りていないんですからね。話している時間がもつたいないわよ」

ナオを守るように、レナがナオの前に立ちはだかった。

「おお、そうだった。それじゃあ、二番をやるか」

一時間の練習時間を終え、全員が帰り仕度を始めた。ナオはどの曲も完璧にマスターしてきていた。マコトが黙っているわけがなかった。

「水嶋。やっぱり、軽音楽部に入ってくれよ。お願いだ」

「ナオちゃんは、今日はあくまで臨時の練習メンバーとして来てもらったの。その話は今日はしないこと。良いわね！」

レナにピシツと言われて、マコトも言葉を続けることができなかった。怖い物なしのマコトであったが、幼馴染みのレナにだけは頭

が上がらないようだ。

ナオ達が一階のレジカウンター内にあるスタジオ受付係に行くと、古参の店員である鈴木がレナに声を掛けた。

「あつ、お嬢様。練習されていたんですか？」

「人前でその呼び方は止めて。Aスタジオ一時間だから二千円よね。それじゃあ、ナオちゃんはゲストだから、四人で割り勘。一人五百円。私がいたからって値引きなしよ」

「えっ、悪いです。私も払います」

「良いつて良いつて。はい、私の分。後はこの三人組から貰つていい」

レナは五百円玉を鈴木に渡した後、ナオに向かって言った。

「ナオちゃん。今日は急いで帰る用事がある？」

「いいえ」

「それじゃあ、私の部屋に来てもらって良い？」

「はい」

「それじゃあ、三人衆。ここに現金払いでよろしく」

レナは、ナオを連れて、とつと店の奥に引っ込んで行った。

「なんだ。レナの奴」

何だか取り残された感じの三人組であった。

レナの部屋に入ったナオは、マコトが強引に勧誘してくることに回避するために、レナが部屋に誘ってくれたと分かっていた。

「ありがとう。レナちゃん」

「んっ、何のことかな？ 私は、単にナオちゃんと話したかっただけだよ」

「う、うん」

レナの部屋にある小さなテーブルを挟んで、二人は座った。

「ナオちゃん。今日のこと、ちゃんと謝るよ。だましたりしてごめんなさい」

レナは正座をして頭を下げた。

「あつ、レナちゃん。そんなことしないで。悪いのは私なんだから。レナちゃんにもお願いされていたのに、私が勇気を持ってなかったから……」

「私は、私の願いが叶うように、ショーコさんと相談して今回のお芝居を打ったことは事実なの。自分の欲望を抑えきれなくてさ。今日、久しぶりにマコトやカズホの音を聴いて、ますます本気で思うようになった。それとナオちゃんのキーボードも最高だったよ」

「……ありがとう」

「今日、こんなお芝居を打ったもう一つの理由は、ナオちゃんにもマコトやカズホの音を直に聴いて欲しかったからなの。ステージから流れてくる音は聴いていると思うけど、観客として聴く音と同じ演奏者として聴く音は違うからね。私は軽音楽部にいた時に彼らの音は聴いているけど、ナオちゃんは聴いたことがないと思ってね。ショーコさんは、二人の音を聴かせれば、ナオちゃんもすぐにバンドに入ってくれるって言うてたけど、私は、そんなに急いでいないの。だって、ナオちゃんには克服しなければならぬ課題が他にもあるものね」

「……」

「今日は、課題の一つをこなしただけ。大変よくできました。残っている課題は、ゆっくり、ナオちゃんのペースで取り組んでもらって良いからね」

「レナちゃん……」

ナオは、レナの心遣いがうれしくて、また涙を流した。

「ナオちゃんは、本当に泣き虫なんだから。でも、その泣き顔が可愛いから、なんとかしてあげようって気になっちゃうんだよね」

「そ、そんな……」

「マコトには私から話しておくから。軽音楽部への入部は、もうちょっと考えさせてあげて。カズホは、マコトみたいに無理に誘っては来ないと思うけどね」

翌週の月曜日の夜。

立花楽器店のリペアコーナーで、チーフの川村が珍しく休暇で、カズホが一人で作業をしていた。

「カズホ」

名前を呼ばれたカズホが顔を上げると、レナがカウンターの外に立っていた。

「ちよつと話があるんだけど良いかな？」

「あ、ああ」

仕事中にレナが話し掛けてくることは今までなかったから、カズホはちよつと驚きながらも頷いた。

レナは、カズホの作業用机と向かい合う川村の作業用机の前の椅子に座った。川村が休暇だと知ってやって来たのだろう。

「とりあえず作業しながらで良いか？」

「ミスらないでね。ナオちゃんの話だから」

カズホの手が止まった。

「水嶋の話って？」

「カズホはナオちゃんのことをどう思っているの？」

唐突な質問に、カズホは動揺を隠すことはできなかった。

「な、なんだよ。藪から棒に」

「藪から棒でもないと思うけど。……でも、ナオちゃんって本当に可愛いよね。服装や髪型で誤魔化されている人が多いと思うけど……。カズホもとつくに気がついてるんだよね」

「どついう意味だよ」

「相変わらず、私に対しては冷たいものの言い方をするのね」

「そ、そんなことはない」

「ふふふ。ごめん。私に対する態度を責めるためにここに来たわけじゃないから。でも私を含めて学校の女子みんなに対するカズホと、ナオちゃんと話している時のカズホは、別人みたいだよ」

自分でも疑問に思っていたが事実であることは間違いない、そのことを改めてレナから指摘されて、カズホは何だか腹が立ってきた。

「レナには関係ないだろ」

「関係ないといえはないけど、関係あるといえはあるのよ」

「何言っているのか分からないよ」

レナは一瞬微笑んだ後、真正面から視線を逸らすことなくカズホを見つめた。

「カズホも気づいていると思うけど、ナオちゃんは、ずっと悩んでいることがあって、あの服装や髪型はそれが解決できていないことの証なの」

「レナは、その悩みがどんなことを聞いたのか？」

「うん、聞いた。……ナオちゃんはある呪文に悩まされているの」

「呪文？」

「ええ。でも、どんな呪文なのかを私の口から言うことはできないわ。それは分かってくれるでしょう」

「ああ」

「そして、そのナオちゃんの悩みを大きくしているのはカズホなんだよ」

「俺が？」

「そう。軽音楽部への入部を悩んでいるのもカズホがいるからなの」

「……」
「もし、カズホがナオちゃんのことを好きなのなら、ちゃんと彼女に伝えてあげて。そういう関係になることは全然考えていない、ただの同級生のジャズ談義仲間だって考えている場合でだって同じ。」

とにかく、カズホがナオちゃんのことをどう思っているのかを、ちゃんとナオちゃんに言ってあげて。そうすることで、ナオちゃんは悩みを解決するための最後の一步を踏み出せると思うの」

「……」

「やっぱり、ナオちゃんが悩まされている呪文を破れるのは、カズホしかいないと思うの。でも、そのカズホが、ちゃんと自分の気持ち伝えてあげないことが、彼女をより苦しめているってことを分かってあげて。……お願い」

「…………どうして、レナは、そんなに水嶋のことを心配するんだ？」
レナは、いったん視線を下げた後、微笑みながら再びカズホを見つめた。

「ナオちゃんの悩みが解決されることが私のためにもなるからよ」「どうして？」

「私は、ナオちゃんはカズホにぴったりの女の子だと思っているの。そんなナオちゃんがカズホの彼女になったら、一年前のことは、もう私の記憶から消え去ってしまうに違いないの。だってそうでしょ。もし、ナオちゃんが私と似ている女の子だったら、なぜ私が選ばれずにナオちゃんが選ばれるのかって悩んじゃうけど、ナオちゃんには、私にはない魅力がいっぱいあって、カズホがナオちゃんを選んでもくれると納得できちゃうんだよね。私の心の絆創膏にもなってもらえる素敵な女の子なのよ」

「…………」

「私もナオちゃんが大好きなの。もし、カズホがナオちゃんをいらないって言うのなら、私がもらっちゃおうかな」

「えっ」

「ふふふふ」

レナは席を立ち、リペアコーナーを出て行こうとしたが、出口付近でふと立ち止まり振り返った。レナにしては珍しく、ちょっと恥ずかしげに見えた。

「カズホ。この前のセッション、最高だったね。やっぱり、私は、マコトとカズホの音が好きなんだ。ハル君のドラムも良いね。ナオちゃんも入ってくれたら、私、もう一度、軽音楽部に入部させてくれないかな。…………あつ、休部中だから活動再開か」

「そうだな。俺もレナのボーカルを久しぶりに聴きたいよ」

「…………ありがとう。それじゃあ」

ちよつとはにかんだような笑顔を見せて、レナはリペアコーナーを出て店の奥に引っ込んで行った。

カズホはしばらく作業が手に付かなかった。

同じ頃。

ナオは母親と妹と三人で夕食を食べた後、リビングで妹の勉強を見てあげていた。妹の沙耶は、再来週の日曜日に母親と動物園に行く約束をしていたようであった。

「ねえ、お姉ちゃん。お姉ちゃんも一緒に動物園に行こうよ」

「うん、良いよ」

「わーい。お母さん、お姉ちゃんも行くって」

「奈緒子ちゃん、良いの？」

「え、ええ」

その時、玄関のチャイムが鳴った。

「あっ、お父さんだ」

妹が母親と一緒に玄関に向かう。

「ただいま」

「おかえりなさい」

「お父さん、おかえり〜」

リビングに父親が入ってくると、ナオも「おかえりなさい」と声を掛けた。上場企業の課長職にある父親は、普段はもっと遅く帰宅し、終電で帰宅することも度々あった。今日は久しぶりに早く帰宅できたようだった。

「こんなに早く帰って来られるんだったら、もうちょっと夕食を待ってたら良かったわ」

「沙耶が寝る時間が遅くなっちゃうだろう」

「それもそうね。あなた、ご飯にしますか。それともお風呂になさいますか？」

「風呂に入ってくるよ。ああ、そうだ。奈緒子」

「なに？」

「実は、今日、取引先からアリス・クレイトンのライブチケットをもらったんだよ。でも残念ながら、その日は仕事があって行けそうにない。奈緒子もアリス・クレイトンが好きだっただろう。チケット

トは二枚あるから、誰か友達と行ってくるか？」

「えっ、いつなの？」

「今度の土曜日の夜だよ。せつかく頂いたんだから行かないともったいないしね」

ナオの頭にはカズホの顔が浮かんだ。

(佐々木君にあげよう。きっと喜ぶはず)

「うん、それじゃもらっておく。ありがとね」

翌日の夕方。ドールのいつもの席。ナオは、カズホの喜ぶ顔が見られると思つて、朝からずっと楽しみにしていた。

「あの、佐々木君」

「なに？」

「今度の土曜日の夜つて、やっぱりバイト？」

「いや。土曜日はバイト休みだよ」

「そうなんだ。あのね、お父さんが、今度の土曜日に渋谷のライブハウスであるアリス・クレイトンのライブのチケットをもらったんだけど、お父さんは仕事で行けないからつて言つて、私がチケットもらったの。佐々木君、行くかなつて思つて」

「マジで！ 行きたかつたけど、けつこう高かつたから諦めていたんだ。本当にもらつちやつて良いのか？」

「うん。どうせお父さんももらったチケットだから。二枚あるから誰かアリス・クレイトンが好きな人と一緒に行つて」

「えっ、……水嶋が行けば良いじゃないか。せつかくもらつたんだろ」

「でも、一人じゃ行きにくいから……」

「じゃあ、一緒に行こうぜ」

「えっ、私が佐々木君と一緒に……。駄目です、駄目ですよ。変な噂になつちやつて佐々木君にご迷惑掛けちゃつたらいけないし」

「なんだよ。まだ言つてんのか。水嶋という変な女の子と俺が付き合つているんじゃないかつて噂になつたつて、俺は全然、迷惑じゃ

ないって、前にも言ったよな」

「でも……、休日に二人きりで会っていたら、デートしてるって思われちゃいますよ」

「デートだから良いじゃん」

「えっ！」

「俺は、水嶋とデートしてたって噂になってもらいたいくらいだよ。そうすれば、教室でこそそしなくても良くなるだろう」

「……わ、私はまだ怖いです。学校の誰かに見られたら……」

「水嶋が学校の誰かに見られるのが嫌なら、変装して来れば良いんじゃないか」

「変装？」

「別に別人になれって言うわけじゃなくて、……例えば、その三つ編みを下ろしてくるだけでも良いじゃん。たぶんその三つ編み、学校では一回も下ろしていないだろう」

「……うん」

「みんな、水嶋イコール三つ編みってイメージがもうできていると思うから、髪を下ろせば、それだけで水嶋だって分からないんじゃないかな。それに……俺も髪を下ろした水嶋を見てみたい気がするし……」

「……分かった。じゃあ、行きます」

「本当か？ 良かった」

ナオが見たかった、カズホの喜んだ顔が見れた。

アリス・クレイトンのライブの日。

ライブは午後七時から開始だったが、カズホとナオは、午後五時に渋谷駅八チ公前で待ち合わせという約束にしていた。

ナオは、家から三つ編みを下ろしてくるのが、何となく家族に対して恥ずかしかったため、午後三時には三つ編みのまま家を出て、デパートのトイレで髪を下ろした。櫛で丁寧にブラッシングをしたが、三つ編みのくせは自然なウェーブのようになっていた。

ナオは、午後四時過ぎには八千公前に立っていた。眼鏡はそのままだったが、ちよつと三つ編みのくせが残った黒髪のロングヘア。ポシェットのような小さな鞆をたすきに掛けている下には、淡いイエローのシャツに薄いピンクのサマーカーディガンと、ふわつとした白いミディスカート。足元にはシャツと同じ色のソックスに黒いコンバースハイトップ。これまでおしゃれにも無頓着な振りをしてきたナオが、数少ない私服のレパトリリーから、このコーディネートを決めるまで三時間は悩んだ結果だった。

何人かの男がナオに声を掛けてきた。ナンパしようとしたのだが、ナオは怖くて俯いたまま無言で拒否をした。

午後五時に十分前、カズホが駅から出て来た。ノーカラーの白いシャツの上にダークグレーのジャケットを羽織り、ブラックジーンズに黒のショートブーツという出で立ちのカズホは、きよるきよるとナオを探しているようだったが、髪を下ろしているナオに気がつかない様子であった。カズホが近くまで来たとき、ナオから声を掛けた。

「あ、あの、佐々木君」

「あつ、水嶋。……なんか髪を下ろすだけで全然、雰囲気が違うなあ。まったく気がつかなかったよ」

「そ、そうですか」

「あ、ああ。……あの、その服もすごく似合っているよ」

「あ、ありがとう」

「と、とりあえず、腹ごしらえしようか？」

「は、はい」

ライブハウスでの食事は高いと思い、高校生の二人は渋谷駅の近くにあるファミレスに入った。注文が終わって二人だけになると、ナオはカズホからじつと見つめられていることに気がついた。

「あ、あの、佐々木君。わ、私の顔に何か付いてますか？」

カズホに見つめられて、ナオはどこを見たら良いのか分からず俯いたまま、上目遣いにカズホに尋ねた。

「い、いや、ごめん。つい……」

カズホも思わずナオに見取れていたようだった。一旦、ナオから目を反らしたカズホは、すぐに視線を戻した。

「あつ、そうだ。水嶋は、どうしてアリス・クレイトンが好きになつたんだ？」

「お父さんから勧められて、『裏通りのアリス』っていう『ムーンフラワー』の前のアルバムを最初に聴いたんです。お父さんはそっちの方が好きだったみたい。でも、それでアリス・クレイトンに興味が湧いて、『ムーンフラワー』も引つ張り出して聴いたんですけど、一回でとりこになっちゃいました。アップテンポの曲も良いですけど、私はバラードナンバーの『マーメイド・ドロップス』が大好きなんです」

「おお、そうだな。確かにあれは名曲だよな」

「佐々木君は、どの曲が好きなんですか？」

「俺は、やつぱりベースを中心に聴いてしまう癖があつて、アリスのアルバムに良く参加しているテレンス・ショウっていうベーシストのベースが好きでさ。特に『スターライトボサ』っていうサンバナンバーが最高だよ」

「ああ、そうですね。すごくノリが良くて自然に身体が動いちゃいますよね」

「そうだよな。俺も将来は、ああいうリズムの音楽もやってみたいなあ」

「そうですね」

ナオは、カズホ達とのセッションを思い出した。カズホのベースはもちろん、マコトのギターやハルのドラムは、ナオが中学校時代に結成していたガールズバンドよりは数段上のテクニクに裏打ちされた、ナオが今まで感じたことのないグルーブ感を感じさせてくれた。そのうねりの中でキーボードを弾くことがこんなに幸せだったのかと、ナオは、そのセッションの時に感じていた。

(佐々木君達とバンドをやりたい。でも……)

ファミレスを出て、二人はライブハウスに向かったが、その歩道には溢れるほどの人の波が押し寄せていた。

「うわ、すげえ人混み。さすが土曜の夜の渋谷だな」

二人は、人の波を掻き分けながら進んでいたが、小柄なナオは、逆方向からやってきた人に押されて後ろにひっくり返りそうになったり、また、ちょっと離れると見えなくなってしまい、そのたび、カズホがナオを探さなくてはならなかった。

「水嶋」

「はい？」

ナオの右手が、突然、カズホの左手に包まれた。

「あっ」

「このままじゃ、水嶋と離ればなれになってしまいそうだから……。行くぞ」

「は、はい」

ナオは、カズホに手を引かれて歩いて行った。初めて男の子と手を繋いで、最初は恥ずかしかったナオも、カズホの左手からナオの右手に、その暖かさとともに、純粹に自分のことを気遣ってくれているカズホのやさしさが伝わってきて、いつの間にか恥ずかしさはどこかに消えてしまっていた。手を繋いで歩いていることが、その時のナオにとっては、ごく自然なことのように思えてきて、息をしていることと同じように、まったく意識の外に置かれていた。ライブハウスに着き、チケットを鞆の中から出す時になって、手を繋いでいたことを思い出したほどであった。

ライブハウスはステージに向かって扇形をしており、カズホ達の席は、その後方で小さな長方形のテーブルを前にステージに向かって並んで座る所であった。店員に案内されてその席に座ると、意外と二人の席が近いことが分かった。多くの観客を収容するために、少なくともペアの客の席はできるだけ接近させているのかも知れな

かった。肩が触れ合うほどに近い席に隣り合って座った二人は、しばらく黙ったまま、まだ暗いステージを見つめていた。

「水嶋」

「はい」

ナオがカズホの方を向くと、カズホの顔がすぐ近くにあった。二人は見つめ合ったまま話をした。

「ジャズのライブって、本当に久しぶりだよ」

「私も中学生の時に、お父さんに連れて行ってもらって以来です」

「でも、俺、本当は客としてジャズライブを見るのは初めてなんだ」

「えっ、どういうことですか？」

「実は、立花楽器店が後援をしていたジャズトリオのライブの裏方として参加して、舞台そでから見てたんだよ」

「そうなんですか」

「今日も何か仕事をしないといけないような気がしているんだけどさ」

「ふふふ。貧乏性なんですね」

「まあ、貧乏なのは否定できないけどな」

「えっ、……び、貧乏性って言葉の使い方、間違っていましたか？」

「ああ、俺、ちよつと傷付いたかも」

「えっ、本当ですか？ どうしよ」

「ははは。久しぶりのジャズライブを前にちよつと緊張していたけど、水嶋を弄くってリラックスできたよ」

「もう、また……。でも、お役に立てたのなら本望です」

二人は見つめ合いながら微笑み合った。今日は、渋谷駅で会ってから、何となく二人とも緊張していた感じであったが、ナオは、いつもどおり、ドールで話をしている感じがしてきて、ナオ自身もリラックスできた気がした。

ステージが始まると、カズホは演奏に夢中になっていた。リズムに身体を揺らし、時々、両手でベースを演奏しているような仕草を

していた。ナオも演奏に夢中になりながらも、時々、カズホのそんな仕草を横目で見てほほえましく思い、思わず笑った。

「なに？」

「ううん。佐々木君、楽しそうだなって思って」

「おう、最高だよ」

ライブは大盛況であった。二回のアンコールもあり、最後はスタンディングオベーションとなった。カズホもナオも惜しみなく拍手を送った。

ライブハウスを出ると九時を過ぎていたが、まだ、多くの人で通りはごった返していた。

「水嶋」

「はい？」

カズホは、ナオに左手を差し出した。

「まだ人で一杯だ。迷子にならないようにな」

「は、はい」

手を繋いで、二人は駅に向かって歩いた。

カズホは、もっとナオと一緒にいたいと感じていた。ナオも同じ気持ちだったのだろうか、二人は相当ゆっくりと歩いていたようで、何人もの人に追い抜かれていった。

「水嶋。ありがとうな。今日は最高に楽しかったよ」

「ううん。私は何もしていないよ。お父さんにもらったチケットを渡しただけ」

「そんなことはないよ。……ああ、そうだ。水嶋のお父さんにもよろしく言っておいてくれよ」

「う、うん」

二人は、しばらく黙って歩いた。

土曜日の夜の渋谷は、昼間よりも人が多いくらいで、酔った若いサラリーマンや学生のグループが騒ぎながら練り歩いており、二人にぶつかって来るように向かって来る一団もあった。そのたび不安

げな表情を見せるナオを守るように、カズホは、ナオを抱き寄せたり、ナオの前に立って酔客を睨み付けたりした。女性に対するエチケットとか、男性としての義務感に駆られて行動しているのではなく、ナオを守りたいという自分の気持ちに正直に従っているだけだった。

カズホは、今まで何人もの女の子と手を繋いで歩いたことがあるが、そのほとんどは女の子の方から求めてきたものだった。自分から手を繋ぎたい、守ってあげたいと思った女の子は、ナオが初めてだった。

（俺が水嶋を守るんだ。小さくて、泣き虫で、運動音痴で、そして誰にも言えない悩みを抱えている水嶋は、他の誰でもない、この俺が守る！）

カズホは、知らず知らず、ナオの右手を強く握っていたようだ。

「あつ」

ちよつと痛かったのか、ナオが声を上げた。

「あつ、すまん。痛かったか？」

「ううん、大丈夫。……でも、佐々木君の手って大きいんですね。

ベースを弾くには良いのかも」

「別に男としては普通の大きさだと思ってるけどなあ。水嶋の手がちっちゃいからじゃないのか。これでよくピアノが弾けるなあ」

「そ、そんなにちっちゃいっちゃいって言わないでください」

「ははは。ごめん。……でも、そんなちっちゃな水嶋が可愛いんだよ」

「……か、可愛い？」

いきなり、カズホから「可愛い」と言われて、ナオは思わず立ち止まってカズホを見つめた。カズホも手を繋いだままナオを見つめていた。二人は多くの人が行き交う歩道の真ん中で向き合っていた。「そうさ。いつだったか、水嶋は、自分は可愛くないって言うだけ、今日の水嶋はすごく可愛いよ」

「……」

「いや、本当はドールで毎日会っている時も、水嶋が可愛いことに気がついてたのかも知れない」

（そうだ。水嶋が単にジャズが好きただけの魅力のない女の子だったら、俺は、毎日、ドールであんなに話をしただろうか？）

カズホの心の中にレナの言葉が響いてきた。

『カズホの気持ちをナオちゃんにちゃんと伝えてあげて』

（俺は……、水嶋のことを……）

カズホは、またナオの手を引いて歩き出した。

「なあ、水嶋」

「はい」

「やっぱり一緒にバンドをやるうよ」

「……」

「テクニツク的にも全然、問題ないって証明済みだろ」

「……」

「それに、俺……、もっと水嶋と一緒にいたいんだ」

「えっ」

「一緒にバンドをすれば、もっと一緒にいられるだろう。ドールだけじゃなくって、学校でだって、ずっと話してられる」

「駄目です。私は……駄目なんです」

「水嶋。その駄目な理由を俺に打ち明けてくれないか。前にも言ったけど、水嶋と一緒にバンドができるためだったら、俺は何でもするよ」

「佐々木君……」

しかし、ナオは、なかなか言い出してくれなかった。二人の周りには駅に向かう大勢の人がいた。カズホは、ナオが話しづらいかもと考えて、どこか静かな所に行こうと考えた。

丁度、通りに面して小さな児童公園があった。街灯の光でそんなに暗くはなく、人影は見えなかった。

カズホは、ナオの手を引いて公園に入り、ブランコの前に連れて来た。ナオの手を離し、カズホは二つあるブランコの一つに座った。

自然に、ナオももう一つのブランコに座った。

カズホは、前を向いたまま、ナオに話し掛けた。

「水嶋」

「はい」

「レナと俺の間にあったことは、レナから聞いているんだろ？」

「うん」

「レナは、素敵な女性だし、バンドメンバーとしても最高の奴だよ。でも、やっぱり相性というのがあるのかな、レナと恋人という関係になることは考えられなかった」

「……」

「でも水嶋とは、もっともっと仲良くなりたかっていつも思ってた」

「えっ」

「ドールで水嶋と話している時が楽しくて、……ずっとこのまま一緒にいたいと思っていた」

「……」

「今日はすごく楽しかった。もちろん、大好きなアリス・クレイトンのライブを観ることができたからってこともある。でも俺は水嶋とずっと一緒にいられたから楽しかったんだ。水嶋と一緒にいられたから……嬉しかったんだ」

ナオは何か耐えられなくなったように項垂れて、体を震わせていた。

「私は……私は……どうしたら良いの？ どうしたら……」

ナオの目から大粒の涙がこぼれた。

「水嶋。俺と一緒にいることが水嶋の悩みを大きくしているんだとしたら、俺がその水嶋の悩みを打ち砕く。絶対に！」

ナオはしばらく俯いていたが、意を決したかのように顔を上げ、カズホの方を向いた。

「……分かった。佐々木君なら、私を苦しめる呪文を解いてくれるかも知れないから……」

ナオは、レナに話した時と同じように、母親と妹との関係をカズホに話した。

「そうか。そうだったのか」

「レナちゃんからは、ありのままの自分になれば良いって言われました。それは分かっているんだけど、どうしても踏み出せなくて…」

「水嶋は本当はお母さんのことが嫌いなんだろう？」

「えっ？」

ナオは唐突なカズホの言葉の意味が分からなかった。

カズホはブランコに座りながらも、上半身をナオの方に向けてナオの顔を見つめながら再度問い掛けてきた。

「だから、水嶋のお父さんを奪って、自分が生んだ妹さんだけを可愛がっている、血が繋がっていない今のお母さんをさ」

「……ううん。そんなことはない。お母さんは私と妹とに分け隔てなく接してくれる素晴らしい人よ。私が素直になれないだけなの」

「嘘だな」

「えっ」

「水嶋は自分に嘘を吐いているだろう？」

「そ、そんなことは……」

「俺は俺の父親が嫌いだ」

「えっ？」

「俺の父親は妻子がありながらお袋と不倫をして、お袋が俺を身ごもったら、さっさと認知はしておきながら、俺には一度も会いに来やしない。もっとも俺も会いたいと思ったことはないけどな」

「佐々木君……」

「血が繋がっている父親だって嫌いになるんだ。水嶋が血のつながっていない母親のことを嫌いだって思っても全然自然だろ」

吐き捨てるように言ったカズホの言葉に、ナオは全身を鞭打たれた。今まで自分の境遇に愚痴一つ言わなかったカズホの口から出た

父親への憎しみ。何も飾らず真つ直ぐ投げつけられた本音の言葉。それはナオが今まで感じたことのない鋭さを持って、ナオの心に深くえぐり込まれてきた。

しかし、ナオは、その本気でぶつけられた言葉を本気で返そうとしていない自分に気がついた。本当は酷いことを考えている自分の心の奥底を悟られまいと言葉を取り繕い飾り立てようとしていた。

ナオは認めざるを得なかった。母親に対して素直になれないというのは、母親を好きではない自分の気持ちを隠すための口実にすぎなかったことを。そして、そんな自分の酷い一面を家族にも友達にも知られることを恐れていたことを。

ナオは自己嫌悪に押し潰されそうになりながら、焦点の定まらない目をして前を向いたまま呟くそうに口を開いた。

「そうなんだ。……佐々木君の言うとおりです。お母さんが嫌いなのに、私は良い子ぶって、お母さんを信用しているふりをしていただけなんです。……私は嘔吐きなんです」

「だったら、お母さんに『あんななんて嫌いだ！』って言ってやったら良いじゃないか？」

「そ、そんなこと言えない。だって……家族だから。お父さんと妹とも……お母さんと……みんな一緒に楽しく暮らしたいの」

「それじゃあ水嶋はこれからも自分の気持ちに嘘を吐き続けて、お母さんと楽しく一緒に暮らすふりをしていくつもりなのか？」

「……」
カズホはブランコを降りて、ナオが座っているブランコの前に立った。

「水嶋」

「……はい」

ナオは立ち上がることもできずに、ブランコに座ったままカズホを見上げながら見つめた。

カズホが大きく息をついた。

「俺は水嶋が好きだ」

「えっ！」

突然の愛の告白に呪文が悲鳴のようにナオの心の中で鳴り響いた。ナオは胸が苦しくなって、胸の前で手を組みながら少し俯き加減になり体を震わせることしかできなかった。

しかし、カズホは、そんなナオにかまうことなく言葉を続けた。

「俺は眼鏡っ娘で三つ編みの水嶋が好きになったんだ。でも、それが嘔吐きな水嶋だというのなら……俺はそんな水嶋は好きになれない」

今度はカズホとずっと仲良くなりたいたいと思っていたもう一人のナオが呪文を押し退けて出て来て、ナオに不安げな表情をさせてカズホを見つめさせた。

「……佐々木君」

「水嶋は俺にも嘘を吐いているのか？　いつもドールで見せてくれていた水嶋の笑顔も嘘だったのか？」

「違う！　私は佐々木君の前ではいつも本当の自分でいられた。時々、呪文に悩まされたけど……、でも、佐々木君には嘘なんて吐いてない！」

「だったら！　……俺がいつも水嶋の側にいるよ。家でも学校でも本当の水嶋でいられるように」

「……」

「水嶋が俺のことをどう思ってくれているのか知らないけど、俺は水嶋とずっと一緒にいたいんだ。俺がずっと一緒にいるから、その眼鏡をはずして髪を下ろしてくれ。おしやれで素敵な女の子になってくれ。お母さんに言いたいことが言える水嶋に、俺の彼女だって学校で自慢できる水嶋になってくれ！」

ナオの心の中でカズホの言葉がリピートされ増幅されていった。

（佐々木君が側にいると言ってくれた。佐々木君がこんな私を好きだって言ってくれた。……もう何も怖くない。もう逃げちゃ駄目。逃げたら佐々木君ともこのまま……。嫌だ。そんなの嫌だ！）

呪文は断末魔をあげて打ち消されようとしていた。

(私は……私は……佐々木君の隣にいつもいられる……可愛い女の子になりたい！)

呪文は解かれた。

ナオは座っていたブランコから立ち上がると、迷うことなく真っ直ぐとカズホを見つめた。

「佐々木君。私……もう嘘は吐かない。誰にも嘘は吐かない。そんな自分に、本当の自分に変わることができる！ だって、佐々木君に勇気をもらったから……。私も佐々木君ともっと一緒にいたいから！」

ナオは、また涙が止まらなくなってしまった。

ずっと側にいるというカズホの言葉が嬉しかった。

こんなに自分のことを思ってくれるカズホの気持ちが嬉しかった。そして、カズホと出会えたことが嬉しかった。

「佐々木君。私も佐々木君が好きです。大好きです！ だから！」

……ずっと側にいてください」

「……水嶋」

ナオは、やさしくカズホに抱きしめられた。ナオは声を上げて泣き出した。

「佐々木君……ありがとう。佐々木君」

ナオは、しばらくカズホの胸で泣きじゃくった。生まれたての赤ん坊が、その新しい生命の存在を知らしめるように。

しばらくすると、カズホが声を掛けてくれた。

「落ち着いたか？」

「……うん」

ナオの眼鏡は涙で汚れていた。

「こんなに眼鏡が汚れていたら前が見えないんじゃないか？」

カズホがナオの眼鏡をはずした。

「あっ」

視力の悪いナオは途端に何も見えなくなったが、すぐに目にハンカチが当てられた。カズホが涙を拭いてくれていたのだ。

ハンカチがはずされると、ぼんやりとカズホの顔が見えた。突然、その顔が近づいて来て、ナオの視界を覆ったと思うと、ナオの唇に何か触れた。何が起きたのか分からなかった。唇に触れていた柔らかいものはすぐに離れた。そして、カズホの顔が元の位置に戻った。

カズホは、ナオに眼鏡を掛けてくれて、ちょっと照れくさそうに言った。

「自分が可愛くないという呪文には、これで二度とかからないかな？」

第八章 金髪のドール

いつもと同じように月曜日が始まった。

しかし、都立美郷高校に登校していた生徒達は、レナと一緒に登校していた見慣れぬ女生徒を見て騒然となっていた。

「立花さんと一緒に歩いている女の子、誰だ？」

「立花さんと仲良くしゃべっているから立花さんの友達か？」

「あれ、うちの制服だよな。あんな子、初めて見るんだけど」

「見た目、不良っぽいけど、けっこう可愛くない？」

「けっこうどころか、フランス人形みたいにめちやくちや可愛いぞ」

「立花さんと一緒だと、まるで日本人形とフランス人形が並んで歩いているみたいだ」

レナと一緒に登校していた小柄な女生徒は、手提げとリュックのいずれにもなるバッグを背負っていること以外は、ミニにしたスカートに紺のソックス、そして茶色のローファーと、レナと同じような格好をしていた。

しかし、そのセミロングのストレートヘアはプラチナゴールドに輝いており、レナの黒髪ロングヘアと鮮やかなコントラストを見せていた。

そして、その金髪少女の大きな目の瞳は、太陽の光の加減もあつてか、やや緑色を帯びており、色白の肌と相まって、見ようによっ

ては外国人の少女のようだった。

その二人の目の前に、カズホとマコトとハルの三人組が珍しく揃って登校していた。レナと金髪少女は目を合わせて頷きあうと、早足で三人組に追いついた。

「おはよう」

金髪少女が三人組に声を掛けた。カズホは、声の主が誰かすぐに分かったようで、笑顔で振り返ったが、金髪少女を見たカズホの顔は、いつものクールさが微塵もなく、ポカンと口を開けたままだった。

「み、水嶋！」

カズホは、すぐに気がついたようだったが、マコトとハルは、その金髪少女がナオであることにまだ気がつかないようだった。

「どうしたんだ。その格好」

「ありのままの自分に変わったの。レナちゃんにちょっと協力してもらったけどね」

「そ、それがあるままの水嶋なのか？」

「そうよ。ささきく……ううん、カズホと一緒にバンドをやる水嶋奈緒子はこんな感じかなってね」

「水嶋なのか？ どうしちゃんだよ」

相当遅れて、マコトが騒ぎ出す。ハルも目を丸くするばかりで言葉が出なかったようだ。

「どうしたって、髪を下ろして、ちょっと染めて、コンタクトにしてください」

レナがナオに代わって解説をした後、真剣な顔付きになって、マコト達に手を合わせた。

「マコト。カズホ。それからハル君。ナオちゃんが軽音楽部に入ってくれるっていうから、私も復帰したいんだ。許してくれる？」

「あ、当たり前じゃないか。よし、今日の放課後は部室に集まって緊急会議だ！」

マコトのテンションは、朝から爆発寸前であった。

二年一組の教室にカズホとナオが一緒に入ってきた。ミエコやハルカを始め同級生達も、ただ驚くばかりであった。

担任の平野は頭を抱えた。金髪が二人になって、教室の右後方が異様に明るくなったからだ。一時限目の授業終了後、ナオは平野に呼ばれて職員室に行き事情を聞かれたが、特に問題なしとして放免された。今までカズホの金髪を黙認していた教諭達は、ナオを罰する理由を見つけることができなかった。

ナオが教室に戻ると、ミエコとハルカが飛んで来た。

「ナオちゃん、どうしちゃったの？」

「ひよつとして佐々木君と何かあったの？」

「何もないよ。私、軽音楽部に入部して、カズホと一緒にバンドやることに決めたから、これはそのためのイメージチェンジ。それ以外、私は何にも変わってないよ。だから、これからも友達でいてね」

「カズホって……。ナオちゃん、佐々木君とつき合ってたの？」

「ううん、これから始まるの」

ナオが、実は美少女だったという評判はあつという間に全校に知れ渡った。別のクラスから二年一組にわざわざナオを見に来る者もいた。そしていつの間にか、レナの「クイーン」に対抗して「ドル」というあだ名が男子達の中で定着していった。

そして、放課後に開かれた軽音楽部の緊急会議で、レナの復部とナオの入部が承認され、ついに新二年生バンドが始動することになった。

夕焼け色に染まる五月の空。

ナオとカズホは、初めて学校から一緒にドールに向かっていた。

「でも、お母さんも驚いたんじゃないか？」

「うん、びっくりしてたよ」

昨日、髪を染めて自宅に戻ったナオを見て両親は驚いた。出掛け

る前に美容院に行くと言っていたから、両親とも三つ編みはもう止めるかと期待をしていたのかも知れなかったが、まさか髪を金色に染めることまでは想像していなかっただろう。特に父親は激怒した。「奈緒子！ どういうことなんだ。いつから不良の仲間になったんだ」

「お父さん。この髪は本当の私に戻った証なんだよ」

「どういう意味だ？」

「私、今まで、ずっと家族に嘘を吐いて暮らしてきた。お母さんに遠慮して、本当の自分を隠していた。本当のことを言ってこなかった。でも私は、お父さんとお母さんが結婚する前の私に戻ったの。本当の私に。もう、三つ編みの嘘吐きな私に戻ることができないように、思い切って髪を染めたの」

「奈緒子、お前……」

ナオは、どうして良いか分からないように立ち尽くしていた母親に視線を向けた。

「お母さん。これから私は、自分が言いたいことは遠慮せずに言う。怒りたい時は怒る。泣きたい時は泣く。だから、お母さんもそうして……。私に言いたいことがあったら言って。私がいけないことをしていたら叱って。だって家族なんだから……」

「奈緒子ちゃん」

「本当の家族ならそうだよ。遠慮したり顔色を伺ったりしてお互いに言いたいことも言えないなんて家族じゃないよね。だから……」

「奈緒子……」

一瞬の沈黙がリビングにとどまったが、ナオがすぐに言葉を続けた。

「それから、私、軽音楽部に入部してバンドをすることにしたの。そのバンドメンバーの男の子とお付き合いすることにした。その男の子も金髪に染めているの」

「何だって！ 何という奴だ」

「佐々木君という人。でも、お父さん、心配しないで。お付き合い

は始まったばかりなの。時期が来れば、ちゃんとお父さんとお母さんにも紹介するから。それから髪を染めているからって不良だっ
て決めつけないで。佐々木君は、勉強もアルバイトもバンドも、全部
に一生懸命なの。その佐々木君が私を、本当の私を取り戻してくれ
たんだよ。佐々木君だけじゃない。一緒にバンドをすることになっ
た立花さんという女の子も私を助けてくれた。そんな素敵な友達と
一緒に大好きなバンドができるの。私、今、怖いくらいに幸せなの
」
「奈緒子」

「私は、これまでと同じように勉強も頑張るし、人に迷惑を掛ける
ようなこともしない。お母さんと結婚する前の私がどんな女の子だ
ったかは、お父さんが一番よく知っているはずだよ。だから私を
信じて。お父さん」

「……」

再び沈黙が訪れた。今度は誰も口を開くことなく、時間が止まっ
たかのような空間に立ち尽くすしかなかった。

ナオが無言でソファに座り込むと、それまで父親の剣幕に怯えて
いた妹の沙耶が、ナオの側にやって来た。

「お姉ちゃん。その髪、格好良いね。その髪型のお姉ちゃんと、今
度、一緒に動物園に行けるんだよ」

「うん、一緒に行こう」

「本当言うよね、お姉ちゃんの前の髪型、あんまり好きじゃなかつ
たの。でも、今度のお姉ちゃんは格好良いから、友達にも自慢でき
るんだよ」

「沙耶……」

ナオは、思わず沙耶を抱きしめて涙を流した。

「ありがとう、沙耶。じゃあ、お姉ちゃん、もっともって格好良
くなるからね」

その様子を見ていた父親は、もう怒ることなく、自らを納得させ
るように何回か頷いた後、母親に対して呟いた。

「あの頃の奈緒子が戻って来てくれたかも知れない。やっと……」

並んで歩いているカズホとナオの金髪カップルは、すれ違う人達から否応なしに注目されていた。人から見られることに慣れていないナオは、気恥ずかしく思いながらも、カズホの隣を歩けることが何よりも嬉しかった。

「水嶋……じゃなくて、ナオ」

ナオがカズホを見上げ見ると、カズホはちょっと照れている様子でナオを見つめていた。

「は、はい」

カズホから初めて名前で呼ばれたナオもちょっと照れてしまった。「今更だけど……、その髪、似合っているぜ」

「あ、ありがとう。私……カズホの彼女に、……合格かな？」

「当たり前だろ。俺の彼女だって自慢しまくりたいくらいだよ」

「そ、そんな……」

「ナオ」

「はい」

「彼女らしく手をつないで行くか？」

「あ、あの……、まだ恥ずかしいから……駄目です」

ナオは顔を真っ赤にしながら俯いてしまった。見た目は派手なヤンキー娘のように変わったナオだが、これまでずっと男の子を避けてきたナオ自身がすぐに変わるはずもなく、相変わらず奥手で一途な女の子のままであった。

そんなナオのことをカズホも優しく微笑みながら見つめていた。

「う、ごめんなさい」

「だから……ナオが謝る必要はないだろ」

二人は思わず見つめ合って微笑んだ。

遠くにドールが見えてきた。

ナオは、出会いからずっと二人を見てきたマスターに会うことがちょっと恥ずかしくなってきた。

「マスター、何て言うかな？」

「たぶんマスターはナオだっけ気がつかないんじゃないかな？」

カズホがドールのドアを引いて、二人が店の中に入ると、カウンターの奥に座っていたマスターは、普段通りニコニコ笑いながら立ち上がり、二人を出迎えてくれた。

「いらっしやい。ナオちゃん。お似合いだね」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2542z/>

ドール - 迷子の音符たち - (下)

2011年12月9日01時08分発行